

「めんください、足尾のこと教えてください！ — その2 — 地域おこし協力隊による聞き取り抜粋集 — 2015

この冊子を手にしてくださった方へ

この冊子は、平成25年度から足尾で活動する地域おこし協力隊「**1**」が行っている、生活史聞き取り集の続編です。冊子タイトル「ごめんください、足尾のこと教えてください！」にあるように、私たちの聞き取りでは日常的な立ち話やお茶飲み話、時には突然お宅にお邪魔して、足尾の方の経験談や思い出を教えていた、だいています。「私は何も知らないよ」と言ひながらも楽しそうに話し続けてくれたり、「こんな写真があつてね」とお持ちの資料を見せてくれたり、ボロつと予想外の話題になることもあります。あれば、複数の方から同じキーワードが出たりもします。様々な内容と話し手のお人柄は魅力的で、聞けば聞くほど、まだまだ知らない足尾の姿があることに気づかされています。

私たちの聞き取りで大切にしていることは、今、目の前で語られた「その人の生き方や想い」をできるだけそのまま残すことです。時には、記憶違いや間違いや一方的な見方もあるのかかもしれません、ある人にはそう記憶され、今はそのように話してもらえることも、現在の足尾の姿だと捉えています。前回の冊子と同様に、違和感や疑問を持たれる方もいらっしゃるかもしれません、「数ある足尾にある、二つの視点としての生き方や想い」に、どうかご理解くださいますようお願い申し上げます。

2014年版の冊子では、公害や銅山の仕事や社宅といった、「足尾銅山といえば…」に対応する疑問にまつわる内容を取り上げましたが、この続編では、「治山」と「閉山」が大きなテーマです。ハゲヤマのイメージでおなじみの松木エリアでは、明治30年代から手作業による治山事業が進められてきました【**2**】が、そこで働く多くは足尾の女性たちや土木業を請け負った組の方々でした。銅山と同様に、足尾地域の多くの方が関わった治山事業のありようは、足尾にとって外せない要素といえます。また、昭和48（1973）年の閉山については、よそ者の私たちが安易に触れられないような、あまり聞いてはいけない気もしています。けれども、3年間の中で自然と耳にする機会は多く、これもまた足尾になくてはならないテーマなのだと思います。

最後に、この聞き取りの活動を受け入れ、協力してくれたみなさまに感謝いたします。

2 1 人口減少や高齢化などの進行が著しい地域に、地域外の人材を一定期間誘致し、その地域の活性化を促進するという総務省の取り組み。
明治30年(1897年)、農商務省訓令により東京大林区署が「足尾官林復旧事業」を開始する。(参考：大間々嘗林署・足尾治山事務所、「足尾の治山」パンフレットより)

02 この冊子を手にしてくださった方へ

03 目次

04 凡例

05 | Q6 | 松木ではどんなことをしたんですか？

- 06 松木での仕事 [2015年1月23日]
11 女性の仕事・やりくり [2015年4月16日]
14 要領の良い人 [2015年4月27日]
16 にぎやかな松木 [2015年8月18日]
20 中学生のアルバイト [2015年8月28日]
23 仕事と家事 [2015年9月]

29 | Q7 | “閉山”ってどういうことだったのですか？

- 30 ある坑夫さんにとっての閉山 [2014年1月10日]
[2014年3月5日]
[2015年5月21日]
37 残った人はいない [2014年1月20日]
40 共同浴場での親切 [2014年10月24日]
43 現役の消防団員 [2015年5月10日]
44 引っ越し前の美容室 [2015年5月27日]
46 社宅から見た、閉山から今 [2015年6月28日]
52 猫の手も借りたくなる忙しさ [2015年9月1日]
54 飲み方の変化 [2015年9月2日]

60 編集後記

62 年表

63 用語集

64 クレジット

【凡例】

- 文中に出てくる話し手のうち、男性はM、女性はFとなっている。複数名登場する場合は、Fa、Fbと表示。
 - 聞き手のうち、協力隊員である2名は中山（N）、志村（S）。協力者の好井先生は（Y）と表示。
 - 沈黙は、「……」。省略は、「……（省略）……」と表示。
 - 話の途中で途切れている時は、「」で終わっている。
 - 笑い声はカタカナ表記。
 - 語りの中で誰かの発言の真似などは、「」にて表している。
 - 冊子全体の共通する用語は63頁の用語集に掲載。
 - 他の用語、地名や補足には注を入れ、典拠があるもの以外は協力隊が編集している。
- 〔言葉・名称について〕
- 本文中に出てくる固有名詞や、話し手の方々は匿名で表記しています。
 - 職種や組織の役職などは、聞き取りで使われた名称をそのまま使っています。
 - 事実確認が不十分なため、実際と違う場合もあるかもしれませんので、ご了承下さい。
 - わかりにくい漢字、特殊な読み方をする漢字には、括弧内に読みがなをつけています。
- 〔調査方法・編集方法について〕
- 聞き取りを行った時系列順に掲載しています。
 - 聞き取り抜粋箇所の後に、協力隊2名の事後報告や感想などのコメントを掲載しています。
 - この聞き取り事業での内容は、話し手の方の了解を得た上で文字資料化し、日光市足尾庁舎で保管しています。
- 〔掲載写真のクレジットについて〕
- 写真のクレジットも説明は次の順序で表示しています。
- タイトル（太字ゴシック）
- 撮影者（太ゴシックで括弧くくり）
- メモの抜粋や協力隊によるコメント（ゴシック細字か明朝体）
- 伊東信さん撮影写真のタイトルは、アルバムや写真裏面に記入されているメモから抜粋しています。
- 新井常雄さん撮影写真のタイトルは、協力隊が考えています。

—Q6—松木ではどんなことをしたんですか？



雪の足尾銅山 思い出の仕事(伊東信撮影)

[写真裏面のメモより：山道作りは油断は出来ぬ 足尾松木除雪作業は女の仕事だった 昭和37.3.2日写ス]

足尾以外の地域で「足尾に植樹に行つたことあるよ」と話題に出る頻度は多い。協力隊も、植樹デー【1】などに参加してきたが、1日約1000人ほどの参加者が一斉に山を登り、植樹をする光景は、確かに足尾ならでは。他所からしても、足尾ハゲヤマのイメージは定着しているのだと実感する。一方で、足尾の方にハゲヤマ（松木エリア）の話をうかがえれば、植生盤【2】や砂防工事での事故、女性の働き先であつた山仕事が実体験として語られる。「足尾の女に会いたければ、松木に行け」と言うこともあつたらしい。現在は環境学習として浸透している“植樹”と共に、前々から続いている治山の全貌にも注目していきたい。

松木での仕事

【2015年1月23日】—夫(M)、妻(F)、志村(S)、中山(N)】

昭和30年代に、植生盤や護岸工事の委託業者として、治山の業務を請け負っていたM組。当時の写真を広げながら、業者側から見てきた松木の風景を教えてもらう。

M—うん、根付いたよ。

S—じゃあ、やっぱり良い方法だつたんだ。

M—ほとんどはね、赤土だけで焼けた土が薄く表面に残つていて、それが風でたまつたりしていたんだよね。ガラヤマだから、最初にするのは山の整地。だいたい、山がデコボコだからね。みんな削って、整地して滑らかにしていくわけ。それをするのは、春の前。だいたい1段の間が40センチから場所によっては、20センチの所もあつたけれども。

……(省略)……

S—あの、私の認識なのですが、松木の山には砂利しかなくて植物がない。だから、土を運ぶ必要があつて、土と種が合体した植生盤を使つたのですよね。実際こういう植生盤で植物は根付いたんですか？

S—じゃあ、運んだ土を石で大きくせき止めるようにし

て、その中に更に段々に40センチくらいの土の段をつくり、

そこに植生盤を敷いていくのですね。ちなみに、その植生盤の案をMさんが最初に聞いた時は、どう感じましたか？

あんなに沢山の土がないような岩場に対して植生盤の方

法は業者の立場からすると「大変だな」とか、どう感じられたのかなあって。

M 一仕事は大変な仕事だよ。だけれども、この仕事は金になつた。

S 一そうなのですね。へー。

M 一組で請け負う山じゃない平な土地の仕事と比べると、

倍近くになつたんじゃないかな。

S 一それはどうして良いお金になつたんですかね？

M 一危険手当がつく。いつ、どこから石が転んでくるか、また下が崩れて滑ってこけちゃうかな。そういう危険手当つていうのは、非常に多かつた。

N 一実際に事故とか多かつたんですね？

M 一あつた、あつた。足を滑らして落ちちゃったとか。家(うち)なんかも、2人ほどケガ人を出したから。

……（省略）……

F 一あとは、山の天気は危険でね。突然の豪雨の鉄砲水



植生盤の作業風景

(新井常雄撮影、栃木県立文書館所蔵)

S 一植生盤を作っている様子。機械で圧縮しながら、土に含まれている水分を抜いている。てきた植生盤は一人7枚ほど背負い、山の斜面へと運ぶ。係の人が運んだ枚数をきちんとチェックしていたらしい。斜面に貼り付ける際には、木の釘のようなもので止める。作業中は、日焼けをしないように手ぬぐいで顔を覆っていたり、旦那さんから地下足袋を借りて使っていたとの話も。

で、1回、新車を潰されちゃったんですよ。

S — あらー、本当ですか？ でも、車だけの被害だったら、良かつた方になっちゃうんですよね……。

M — だから、そういう時は山で雨が止むのを待つていてから行くのさ。

F — 「3粒降ると、もう沢山降つてくるから松木を降りる」って、ばあちゃんがよく言つていた。

N — 3粒？

F — 3粒。バラバラつて降るともう逃げないと。結局、枯れ山だから、ちよつと降るとドーツと流れちゃうわけだよね。

S — そつか、そつか。森なら木の根っこで水も溜められるけれども、植物がないから水がバートと来ちゃうわけですね。

M — そうそう。そういう年が5、6年続いた時があつたな。

S — 奥さんも、旦那さんがそういう危険な場所で働いているつて思うと、心配ですよね。何かあったんじやないですか？

F — それでね、夜遊びが好きなのよ。

全員 — ハハハ。

S — そつか？ そつか？

F — 朝も「控えなよ」とか言おうと思うの、でも……ね、危険

な仕事だと思うから、言わざ終いのさ。だってね、私が寝てから、仕事終わって帰るからね。で、朝には弁当持つて仕事を行くから、段取りしなくちゃいけないでしょ。そういう点はありましたよ。普通のサラリーマンと違うから。

……（省略）……

S — 他の方から、「女性で山仕事をしている人は、気が荒い人が多くて大変だった」と聞いたらするんですけど、実際そうでした？

M — 気が荒いといえば、足尾の人は気の荒い人が多かつたんだよ。

S — へー。じゃあ、仕事場で人をまとめるのも大変だったんじゃないですか？

M — それは、班長だよな。昔は世話を焼きつていう人がいて、その人が気を回していたね。で、その上で「今日はどこやれ、ここやれ」って言うのは、だいたい俺が指示をして。

M — あの、石畳は女性が運んだりもしたのですか？

N — うん。で、植生盤っていうのは、だいたい一人何枚つて、一日のノルマは決まっているのですか？

M — うん、一人が100枚。それを15人だと、1500枚

がその日の日当になるんだ。で、10時に雨が降って2時間くらい手がつかないとしたら、雨が降った後の1、2時間で片付けるとか。そういう、手際がよかつた。

S —もし私だったら、働けるかな…。出来合制みたいなもので、大変ですよね。厳しいと言えば、厳しいですよね。ちゃんと仕事を終えなくちゃならないから。

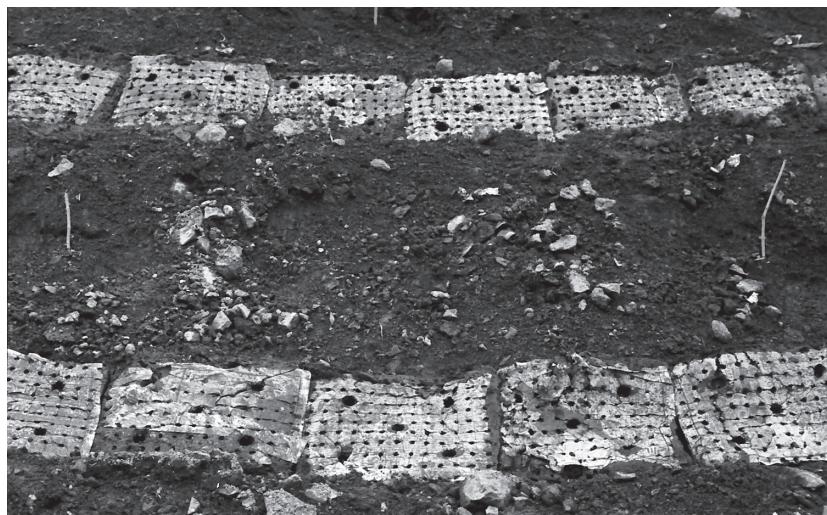
M —あの頃の女の人っていうのはね、今の男の人よりも仕事をしたな。うん。

N —まあ、でもいつの時代も、男より女の方が働くなって思うな。ハハ。

M —で、女っていうのは根が良いからな。男と違つて。男は危ない所だの、高い所だのは良いかもしけないけれども、そういう長い時間やるっていうのは、やっぱり女には敵わない。今でもそうなんじゃないかな。

……(省略)……

M —それでね、作業場の松木ではその当時ウドがもの凄く沢山出たの。みんな昼休みにウド採りに行っちゃうと、集まって来て仕事をするまでバラバラで時間がかかっちゃう。だから俺の場合だけれども、ウドの季節になると、仕事を



植生盤の様子（新井常雄撮影、栃木県立文書館所蔵）

S | 表面の白く見えるものは新聞紙が被せてあるもので、穴は機械で圧縮した跡。植生盤と植生盤の間は約40センチほど。新聞紙を切ったりする準備は、家にいた奥さんが内職でやっていたらしく。

している中から2人を必ずウド採り専門にやつて、それで収穫したウドをみんなで分けてやるの。

S —なるほど。ウドはみんなが欲しいから、ウド採り当番みたいにしちゃつて、それでみんなで分けた。

M —そうそうそう。そうするとね、うんと仕事の能率が上がる。休み無しだから。

S —確かに、バラバラでウドを探りに行つちやうよりも良いですね。

M —30人で30分遅れてみろ、仕事がえらい遅れちやうだろ。そうすると、2人いる分よりも損が出ちやうんだ。

S —確かに、それなら2人の当番が探つてきた方が、他の働いている人たちも安心ですよね。自分たちもウドを食べられるし。

M —貰えるからね。「もう、ウドは飽きた」なんて言うと、「じゃあ、もうウド採りはやめだ」なんてな。

N —ちなみに、ウドの他に植物っていうのは、生えていたんですねか?

M —食べられるものは、別になかったな。

S —では、動物ついていたんですか? 当時の山の方に。

M —当時の山もね、カモシカがたまに見えたくらい。あとは鹿だな。

S —鹿。じゃあハゲヤマでは、やっぱりその、植物とか動物っていうのは基本的にはいない?

M —閉山になつたら、本山の方の人なんかが、銅ついていた犬を置いて行つちやう。足尾から引き上げるために。引っ越し先には連れて行けないからね。

S —でも、犬も生活できないのではないですか?

M —いや、犬も凄いよ。1回だけ見たことがあるのはね、犬が5、6匹で鹿追をするのを見たね。

S —犬が?

M —うん。一ヵ所では固まらない。で何ヵ所かで散らばってね。山の高い所から見ている犬と、下で追っかけるやつが

2匹くらいでね。鹿を追つて行くのを、2匹の犬が山の上から見てるんだ。それで鹿がどっちに曲がるかを確認したら、曲がった方に降りて行くんだよね。殺し方も上手なんだ、仲間内でわかるんじやないんか。鹿1頭くらい食べちやうんだよね。

N —はー、

M — 人間よりも賢かったぞ。あの時はね、6匹だから7匹いたんだよ。

S — でも、その犬は全部捨てられた犬だから、雑種とか、みんな同じ種類ではなく?

M — うん。で、冬場になつたら寒くて死んじゃつたりなんかさ。

S — 涙い。でも、ちゃんと犬たちも捨てられた者どうして群れを作つて、生き延びていた時期があつたのですね。松木でそういうことがあつたんだ…。

M — 僕だつてこうやって見ていて、関心したんだもの。

〔お話を聞いて〕

S — 写真から想像していた植生盤の話が、少しずつ具体化してきた。植生盤はとても素朴なアイディアに感じるが、あまり気にしなかつたかもしれない。ウド当番の話も、業者ならではの考え。自分なら、M組みたいな所で働きたい! 効率や仕事をこなすことはもちろんだが、女性たちに気持ちよく(ウド)が手に入ると安心して)働いてもらう配慮も、事業主として不可欠だったのだろう。

N — 足尾といえば銅山と鉱毒事件を連想するのが一般的であり、治山事業、特に多くの女性が活躍した植生盤や植生袋のことを知る人は圧倒的に少ない。治山事業は古河による鉱毒予防技術の研究・開発とともに公害と表裏一体の歴史だ。Mさん夫妻の話からは、当時の女性の働きに対する尊敬の気持ちや、治山事業に対する誇りが感じられた。

女性の仕事・やりくり

〔2015年4月16日—Fさん、志村(S)〕

社宅のお母さん事情について、根掘り葉掘りいろいろ教えてくれるFさん。「植生盤の仕事は怖いから」ということで、山の道路の整地の仕事を昭和40、50年代にやつていた。

S — だいたい足尾の社宅暮らしの奥さんが10人いたとするじゃないですか、そうすると何人くらいの人が働いていはの考え。自分なら、M組みたいな所で働きたい! 効率や仕事をこなすことはもちろんだが、女性たちに気持ちよく(ウド)ましたか?

F — そうだね、5人は働いていた。

S — あ、じやあ、半分くらいは働いていて、半分くらいは專業主婦みたいな?

F — そうだね。そうして女人人はお針でも編み物でも、で

きる人は家で内職をやつていたよ。内職みたいな、着物の

ね。あの頃はよく着物を着たんだよね。

S — 着物の内職ですか。あと、刺繡とかもやつていたとい

う話を聞いたことがあります。

F — 刺繡みたいなものもね。見本と同じモチーフの刺繡を作るように仕事だよね。お針だのああいうのをする人は良い稼ぎをしたよね。

S — じゃあ、お針とか編み物も結構良いお金にはなったんですか？ でも、やっぱり山仕事の方が稼げるのかな。

F — そうだね。

S — じゃあ、危険が伴わない仕事という意味では、お針ができる人はその仕事の方が良いという感じ？

F — お針なんか、編み物だのがちょっとできる人は良かったよね。山に行って土方をしないだけね。

S — なるほど、内職は確かにそういうのもあったでしょう

ね。でも一方で半分くらいの人は、専業主婦をやられていたということですよね。その専業主婦っていう家と、働きに出る奥さんの家で、何か違いはあつたんですか？ 例えば、同じ

坑夫「4」でも種類が違うとか、何が違うとか。

F — でもないんじやないかな？

S — たまたまそこの家の判断で、そこでは奥さんは専業主婦をやっていたりとか。

F — そうだよね。やっぱり、少しでも借金をすればさ、やっぱり払わなくちゃならないしね。それで、借金をして誰かから借りるっていうのも、「払わない」だのなんだの悪口も言われるしね。やっぱり自分で働いていれば、それだけ余裕ができるじゃない。ね、自分のものも買えるしさ。子どもが小さいちはさ、私らも家にいたけれどもさ。やっぱり子どもが学校に行くようになつたら「もつたいない」なんて、舗装の仕事をやってみたら、やっぱり給料が良かったものね。良かった。

S — あ、でも、山仕事はやってみたいと思つていたなんですか？ Fさんも。

F — うん、思つていた。

S — それは何でですか？ 危険そつだけれども、でも、

F — うん、「舗装の仕事なら、道路で平な所だからできるかな」なんてさ。でも随分歳をとつた上の人らからね、随分

やられたけれどもさ。

S — やられたって言うのは、口でいろいろと言われたということですか？

F — 意地悪されたりとかさ。そして、あの「かじか荘」あるだろ？ そこも A 建設でやったんだから。あの舗装をずっと。あの辺も掘ってさ、あの U 字溝を入れたりさ。ああいうのも私たちが何人か出て入れたんだから。結構楽しかったよ。親方の面倒見も良かつたしさ。とにかくね、うん。給料が月に 2 回になつたからそれが魅力だったね。よかつた。私も好きなものを買ったもんね。

S — 何を買ったのですか？

F — 何買つたんだろう？ 着物を買つたりさ、服を買つたりさ。自分のものは買つたよね。そして、とにかく段々お父さんが働いてくれるから、お父さんの給料で食べて行けたしさ。それだけ、良かつたね、働いてね。偉（せがれ）におもぢやを買ってやつたりさ。よかつたね。

……（省略）……

F — ただ、1 回だけ「出てみるけ、手が足りないから」って 1、2 ヶ月だけれども、植生盤の仕事をしたよね。私は毎日行かなかつたけれどもね。そこでは、板でできた背負子

で植生盤を積んだよ。あとね、箱みたいなのがあるんだよ。箱みたいなのがあって、そこへ砂を入れてさ。砂を入れて、砂

になつていくんですか？

F — 一段々ベテランになつていってね。あれだつたよ、一輪車なんて押せなかつたんだから。それがね、もう上手になつてね。今だつて上手だけれどもさ。最初はね、荷物をひつくり返してさ、本当にやられたものだよ。でも楽しかつたね。結構、同じくらいの年配の人もいたからね。うん、楽しかつた。

仕事は楽しいよ、私。でも、南橋のあの山見てみなよ、ね。私は登れないな、怖いと思ったから。……（省略）…… 植生盤の仕事だと、こういう梯子（はしご）みたいな背負子（しょいこ）に、荷物を乗せて運ぶんだよね。私は「できないから」って言ってその仕事はしなかつたね。で、給料が安くたつていいじゃない、みんなが 1000 円貰う所を 700 円貰つたって良いじゃない、できないんだもの。ね。

S — 山仕事を何年くらい働いていたんですか？

F — そうだね。10 年くらいやつたか？

S — 10 年くらい、結構長いですね。その間に、やっぱり上手

とセメント、ほら、セメントのミキサーがあるだろ、それを混ぜるんだよ。それをヒヨイッと入れたのを見たことあるの。上手いものだよ。

S — 涙い、でも重いですよね。砂とかだから。

F — うん、それでね、他の人に聞いてもね、40～50センチくらいになつているのを背負うだろ、それをねヒヨイってね。ミキサーの穴のまるくなつた所に入れるんだよね、採石とね。とても上手なんだよね。私が見かけたときには「あらー、上手いものだね」って言つたの。石だつてシユツて乗つけて、石垣の積む所にシユツと落つことすの。「あら、ぶつかんないかな」と思うくらい。上手にね。私にはできないと思つたよ。「あんなに大きな石がさ、自分の所に落つこちて来たらどうしよう」つてね。

S — ね、経験なんですかね。

F — そうだね、上手いものだよ。

〔お話を聞いて〕

S — 「シユツ」「ポンツ」と石を積んでいた様子を、ジェスチャーつきで教えてくれた。見ている方は、本当にびっくりするよ

うな身のこなし方だったのだろう。意地悪されたといった、ちょっとドロドロもあるような中でも、上手く冗談を言いながらやつてのけてきた様子は、Fさんのお人柄からすぐに想像ができた。

要領の良い人

【2015年4月27日】— Fさん、志村（S）、中山（N）】

戦時の足尾で、女手一つで2人のお子さんを育て上げた方。様々な仕事をしたが、昭和30年代に「石背負い（いしょい）」と呼ばれる、石垣造りの仕事を経験【3】。

S — 戦争がきっかけで足尾に戻つて来てから、山の仕事をされたのですか？

F — そう、仕事がないでしょ。その時は子どもは一人だけどもね、食べていいじゃないじやない。足尾の女の人が働くしたら、植生盤ばっかり。それで石背負いの働き口があつたから、私もその仕事に使つてもらつたの。でも、重いものを持つたことないのに、背負いをし始めたんだよね。渡良瀬川の川辺から、田元の上の石垣まで石を運ぶんだけれども、川石

は、ゴロゴロしているから背中に当たるの。それが痛いんだけど

れども、途中で離すわけにはいかないでしょ。10人ぐらいそ

ういう人が並んで、そうやって作業をするんだよね。最後

に、その石垣の所に運んだ石を落とすんだけれども、最初

はどうやつて落としていいのかわからないんだよね。慣れる

までは要領が悪いでしょ、まだ入ったばかりだから。要領

の良い人はね、作業前に石を配布される列に並んでいる時

に、自分が大きい石に当たるとわかると、列を抜けておしつ

こに行っちゃう。そうすると、大きい石には当たらないんだ

よね。そういう風に要領の良い人がいた。

S —なるほど。うーん、なんかありそうだな、そういうこと。

人間らしいな。

F —で、私ら新米だから分からないだろ。並んでいて、でか

い石を背負うところ、体が折れるように痛いんだよ。だけ

れども、死ぬ思いで背負ってその場所まで行つてね。こう

やって、石を落とすと「ギャー」って声が出たよ。慣れないう

ちはね。慣れてくると平気だつたけれどもね。ハハ。

……(省略)……

F —当時の仕事場所を通ると思い出すよ。その辛さ。まだ

30、40代くらいだったからね。辛かった。

S —でも、辞めたいとは思わなかつたのですか？

F —辞めたら食べていけないから。

S —そうですよね。それって、Fさんも事情があつて働いて

いて、周りの同じお仕事をしている人もいろいろな事情が

あつて？

F —大変だよ、女の人はね。他に仕事がなかつたんですよ。

うん。内職ぐらいはやつていたけれどもね。女の働く場所

はなかつたからね。

N —お給料つていうのはどのくらいですか？

F —詳しい金額は忘れちゃつたけれど、9時過ぎからかな

ちよつとしか働かない。午後3時くらいには帰つて来る。そ

うすると、一番下の子が私を待つていて、家に入つたすぐの上

がり端で居眠りしているんだよ。……(省略)……まあ

どうにかこうにか、最低の生活はできただろうね。

S —そうですか。じゃあ、短時間で稼げた。

F —そう。だから、まあ、女の働く所としては良かつたん

じやない？

【お話を聞いて】

S — 重い石が当たらぬようわざと列を抜ける人の例は、どの時代にもそういう人がいるんだなど、しみじみ。ズルイと言うこともできるのに、『要領の良い』と言い表してしまって、妙に関心してしまう。負けてたまるか的な根性もあつただろうし、生活のためにサクサクとこなしてしまったタフな感覚を感じた。

N — 「当時の仕事場所を通ると思い出す。辛かつた。」と言ふ言葉が印象的だった。その場所は私も普段通るのだが、何も知らずにいると氣にも留めない。足尾では人々の様々な営みによって、石垣に限らず山の木々や谷の深さ、川の流れまでも変化してきたのだろうと思う。

にぎやかな松木
[2015年8月18日]夫(M)、妻(F)、志村(S)、中山(N)、好井(Y)]
6頁のご夫婦に、改めて仕事内容や、そこで働く方々の様子についておうかがいした。

Y — これ、1日仕事をしていくくらい貰えたのですか？

M — 家(うち)でね、450円くらい。

Y — 1日450円で、それは日給で支払われるのですか？

M — そうそう。

S — 1日行けば帰りには450円お給料が？

M — そういう人もいたけれども、やっぱり15日が給料日だったね。

S — ああ、じゃあ出勤日を計算してまとめてもらうんですね。確かに、女人に聞くとやっぱり家計の助けにはなつたし、子どもとかもいるお宅は生活が大変だったからと言つていました。

M — 下で仕事をする人は300円くらい。山に上がれば450円くらいになる。

S — じゃあ、やっぱり山の上の方がきついというか、大変だったから給料が高かったんですね。

M — おそらく500mくらい上がっているんじやないかな、沢から。

Y — あの、植生盤を一枚一枚置いて固定していくわけですか？それって、結構技術がいるものなのですか？それともしばらくしたら身に付くのですか？

M——うん、できちやうね。山が山だから。斜面に貼り付け
るんですよ、ペタンと。板に乗つけておいて。

Y一貼り付けて、木の釘みたいなもので打ち込んでおく。
：それを貼り付けて、その植生盤にはもう種とかは全部
入っているんですか？

M—全部、種は入っている。ヨモギだとか、アカシアだのイタドリだの。木が3種類か4種類。草の種が主だね。

卷之三

S一私の印象なんですが、植生盤って話だけだとすごく原始的というか、本当に根付くのかなと思うのですけれど

も、庚祭はどうでした？ 効果と、うのま？

M一植生盤そのものが草の芽がね、早いからね。石山の地面があつたかいんだよ。だから、その作業をするのは6月から8月くらいまでだからね。3ヶ月目はほとんど仕上げだな。

……(省略)……

N 一 台風なんかが来た日には全部流れちゃつたりした

んでですか？

M — あるよ、そういう時も。川ができるちゃうんだよな。そういう所を掃除してね。

S — やり直しとかも出て来ちゃいますよね。

S — 出て来る、出て来る。だから、景気がもの凄く良かった。
M — 一足尾内の組が請け負つてそれぞれのやり方があつた
と思うのですが、M組は働きやすくするために何か工夫を
していましたか?

一庵の新作、含糸は見る念

M 一 働の所は 紹料は現金であげていたからね

社長は固いけれども次男のMはやれやかいいから結構動いていて人に飲ませたの。「動く人は飲み食いさせなく

ちや駄目だ一つて。うん。

一 半日ぐらいは仕事を休ませて、豚汁を作つてやつたりな

S 明日から頑張ってくればよな」ってね。それが効いたんだよ。
「『苦労さん』とか『頑張ってくれ』って言うような配慮を

されていたんですね。

Y
— ただ給料を払うだけでは駄目ということですね。

S 一人がやつぱりついてこないと。

M —みかんをちょっと配るだけでも、人はスッと寄つてくるからな。

F — ちょっとした加減なんだよね、人っていうのはね。

……(省略)……

N — 聞いたことがあるのは「足尾の女に会いなければ松木に行け」と。それくらい、足尾の女の人は松木で働いていたと。

F — 働いていた。

M — だからM組だって、だいたい4月の後半くらいから始まるから。そうすると、常備の、常備というのは14、15人いたんだけれども、植生盤の時期には50人くらいに集めたんだから。

……(省略)……

Y — 松木の仕事をする場所まで、女性の人はどうやって行くのですか?

M — 車だね。トラックに乗せて運んで送迎をしたね。

F — で、1週間に2回くらい、トラックの許可を貰いに行くのですよ。警察へ。

Y — トラックの荷台に人が乗っているから許可を得るんですね。

F — だから警察もその頃はバスもなかつたから、許可はしてくれたんだよね。みんなね。そのうち、マイクロバスを買ってね。

N — でも、荷台に女性たちがいっぱい乗っているバスが松木に毎日向かうっていうのは、

F — だから松木は賑やかだったと言うよ、毎朝。

Y — 夏になって、昼間男たちは銅山の中に行っていて、町の中には女人人がいなくなっている。

F — 人口があつたから昔は。あつた、あつた。

S — いろいろな話を聞くと、女性の場合は山仕事か専業主婦か、それかちょっと内職をしたりとか、数名が三養会か事務の仕事をするみたいな?

F — あとは、土方ですね。それしかなかつたもんね、工場がないもん。

S — そうすると、山仕事って女性にとつて一番大きな働き場所だつたんですね。

M — そうだなあ。植生盤ができたから、

M — お金にもなつたんですね。きっと山仕事つて。

F — だから、下で働く男の人たちと、松木の中で働く人の賃金は同じ。

……(省略)……

M — これ(新井さんの写真)は下の方の写真だから。撮影者の

新井さんは足が悪かったから、山の上には登れないんだ。写真の風景は本当に下の方だよ。賃金が安い所だよ。

S — じゃあ、この場所の感じは下の方だからあんまり賃金は高くない? Mさんはもう少し、高い所をやっていたのですか?

M — 最初はどこの組でも高い所ばかりやっていたんだけれども。俺が昭和30、31年かな、松木の営林署の作業所があつたんだよ。そこから中禅寺湖まで歩道を付けたんだよ。中禅寺まで行くと、2時間くらいしか時間がない。それで車で行けるのなら、中禅寺湖は1時間くらいで往復ができた。

S — 全然違いますね。ふーん。

F — 今でも歩いて行けるかね、中禅寺まで。

N — 今は木が茂っちゃって道がわからないんです。

M — まあ、俺が一番奥をやった時はね、昼休みに若い人たちが中禅寺まで行つて帰つて来ていたよ。

S — え、元気ですね。大変な仕事をして、昼休みにはわざわざ行つて帰つて来るという。で、また仕事をするわけですよね。タフだ。

F — 昔の人は働いたもん。

「お話を聞いて」

S — こちらのご夫婦にはいつも、「お茶飲んで行きなさい」と誘われて甘えてしまうが、組ならではの仕事や人づきあいが染み付いているのかもしれない。人の引きつけ方や、気持ちよい労働環境のためには、媚びるわけでもなく、自然な対人の気持ちが大切なのだろうと思われる。働いている人が、休息時間にはわざわざ中禅寺湖に行く例には、重労働の中でも山の環境を楽しむ余裕があったことに関心してしまう。

N — Mさんは常々「人間、結局は気持ちなんだよ」ということを言う。協力隊の2人のこともいつも気にかけて下さり、Mさん夫妻の家には来客が絶えない。きっとM組で働いていた方々も気持ちよく仕事をしていたのだろうと思う。

Y — 多くの女性を使い、山仕事を取り仕切つて來たご夫婦。明るく人をひきつける語りくちが印象的だった。植生盤を背負つて山をあがり、一枚一枚固定していくというきつい仕事をできるだけ気持ちよくやってもらいたいという思いが、語りからもれてくる。ひとは仮にいい金になつたとしても、それだけ

できつい仕事はしないだろう。その気になつてもらうための細やかな配慮をしていたのだろう。出されたおいしいお漬物をほおばりながら、ご夫婦のお人柄を想像していた。

中学生のアルバイト

〔2015年8月28日――Mさん、志村(S)、中山(N)〕

足尾にある植樹のNPOで長く植樹に関っている方。昭和40年代の中学生の頃には、オバチャンたちに混じって植生盤のアルバイトをしていた。

S――前に、子どもの頃に植生盤のお手伝いのようなことをしていたと聞いたのですが。

M――いやあ、バイトだからね。そういう。まだガキの頃、中学生3年生くらいだね。

S――中学3年生で、植生盤のバイトをやつっていたというこ^とですか?――じゃあ、もう植生盤を背負つて、女性がやるみたいに山の上まで運んで?

M――一緒になつて、一緒になつて。

N――結構、他にも子どもがいたのですか?

M――子ども?・まあ、仲間がね。今では足尾にいないけれども、5、6人。それで、知り合いから紹介があつて、「手伝つてもらえないかな、体力のある若い子に」って言う風にね。バイトだから当時のお金で、1回いくらだったかな。ちょっと金額的には思い出せないけれども、嬉しかったんですよ。

S――割と良いバイトだったんですね。

M――そうそうそうそう。ただ、過酷だったよ、正直な話。

S――どんな内容だったのですか?

M――あの、職員がね、遮光ネットがあるでしょ、あれが袋になつて、ミックスになつたものができているわけ。それをスコップで頑張つて入れて、職員がそれをやるのさ。我々はそのできたものを運ぶだけなんだけれども。それを今度は、圧着するんですね。そうすると、厚さが30センチくらいの…、ホームセンターにある板状の芝。ああいうようなくらいの厚さになるんですよ。ピューッて空氣も抜けるし。それを縛つて重ねたものを背負つて、オバチャン連中と一緒に坂みたいな整備された道を通つて現場まで運び上げる。そういうことね。だいたい30枚くらいかな。

N — それで、どのくらいの重さなんですか？

M — だいたい、40キロくらいじゃないかな。

S — えー。それをね、山道登るわけですかね…。

M — 若いから背負えたけれども、オバチャン連中も同じだよ。結局お金になるから、それを何回かやついたら余計みたいな感じ。1日いくらの仕事もあるんだけれども、その場合には一枚いくらみたいな。職員がチェックをしていて「Mさんは30枚、Mさんは30枚だね」って記録していくんだよね、見ていてね。

S — やっぱり、ちゃんとチェックをされていて、その枚数によつて、

M — そりやあそうですよ。積んでくれてね、自分では積めないからね。積んじやうと、起きれないんですよ。重くて。二宮金次郎が苗木を背負っているような形で山頂まで積んで行くんですよ。「山頂」ってチェックをしてもらつて、みんなで並んでね。今やつている足尾で植樹をする時みたいにずっと道沿いに繋がつて登るでしょう。ああいうスタイル。ただ道が階段じゃないから、作られた一人専用の道路をずっと上がつて行くんですよ、現場まで。だから我々も



833段の植樹地（伊東信撮影）| [写真裏面のメモより：俺は一人で登った 大畠沢 山を愛す H18.5.5日]

どんどん上から上がって行くからね。で、下の方に来ると
楽なんだよ、枚数をどんどん植えられるわけ。……（省略）
……テープでラインを引かれている所へ運んだものをス
トックするわけ。測量の人がね、ダンダンとテープを貼つ
てピンで止めていくんだけど。その前段の仕事をアルバイト
がしていたんだよね。

N — 確か、あれですよね、夏の3ヶ月くらいの仕事だったん
ですよね？

M — もちろん、そうそうそう。

N — その、夏休み中にアルバイトをされたということで
すか？

M — 夏休み、夏休み。

S — 丁度夏休みなのですね。

……（省略）……

S — 植生盤を初めてやった時ってどう思いました？仕事風
景だとか、仕事のやり方とかに対して。

M — 「ああ、これを貼り付けるんだ」くらいしか思わなかつ
たね。これを貼り付けていくと、当時の営林署の人に聞いて、
「これを貼り付けたら、自然と発芽するんだよ。雨にあたつ

てね」ってね。「水はやらなくて良いんですか？」と聞いた
ら、「水は天然だから、雨水だけで大丈夫なんだよ」って。
結構、植生盤のやり方に「本当に根付くのかな？」と
か感じるのではと思うんですけども。

M — それは、不思議だったよ。「これがなるんですか？」とい
う感じで。

S — 実際に効果はあったんですかね？

M — 効果が出るまでには、みんな流されちゃつた。もう大雨
が降れば一発ですよ。まあ、当時はね、我々もあんまりそう
いうのに興味も無かつたから、アルバイトでお金を貰えれば
良いなという感じだったからね。それでね、昼休みにオバチャ
ン連中とご飯を食べてさ、そうするとさ「今植えた植生盤
がね、雨風にあたつたりして芽が出てくるんだよ」っていう
のは話に聞いたけれども。「ああ、そうなんだ。それを植え
付けている訳なんだね。木は植えないんですね？」って聞い
たら「それだと、大変な数になっちゃうから、これだと早いん
だよ」ってね。植生盤だと種がいっぱい入っているからね。そ
うすると、群生していくばい出てくるわけなんですね。1

本1本だと大変だからね、確かにね、1000も2000

も種が入っているわけだからね。全部が全部発芽しなくて
も、だから早いのかなという気持ちがあつたよね。だいたい
イタドリなどだからね。あれはもう、根深く入って行くし
数が増えるしね。今考えればね。繁殖率も高いしね。だか
ら、それでやっているのかなと思うくらいですからね。

【お話を聞いて】

S — ピクニックのよう^に植樹デーで山を登ると、40キロの
植生盤を担いで登るのでは、訳が違うと思う。私は植樹デー
でさえ疲れてしまうのに、現在70歳になるというMさんは平
気な顔で一年中登っている。当時の中学生の体力にもだが、
現在の体力にも唖然とする。お話の間、Mさんは終始二口二
口顔だった。長い間、松木に向き合つてこれたのは、子どもの
頃からの感覚があるからなのかもしぬれない。

N — 女性に混じつて子どもが働いていたのも驚きだが、「体
力のある若い子」と同じように植生盤を運んでいた女性にも
驚く。聞き取り中なぜかずっと、Mさんが昼休みにオバチャ
ンたちと一緒に飯を食べる様子を想像していた。Mさんは
きっと、とても可愛がられたんだろうなと勝手に思った。

仕事と家事

【2015年9月上旬—Fさん、志村(S)】

植生盤経験者を見つけるのが難しいと予測していた所、よ
くお茶飲み話をさせていただいている方が経験者と判明。
こんなに近くにいるとは…と、慌てて昭和30年代の仕事に
ついておうかがいした。

S — 植生盤の仕事は、何歳くらいの時に始めたんですか?
F — 何歳くらいだろうな。：子どもらが学校に行つている
時だよね。

S — やっぱりお友だちに誘われて？

F — そう。前橋の當林署の請け負いだったみたいでね。人に
頼まれてから出たから、長い期間は勤務しなかつたけれど
も、本当に暇な時に出たくらいでね。だけれども、朝が早い
からね。

S — 何時くらいに出るのでですか？

F — そ^うだね。8時かな。車が迎えに来るでしょ？で、社宅
の人を全部拾つて行くんだけれども、ここらだけでも5、6人
いたからね。私が一番初めに車に乗つて、次々寄るんだよね。

S — 最初に植生盤の重いのを積んだり、岩場の斜面で働いた時って、どういう風に思いましたか？

F — その時はみんな友だちが一緒に働いていたからね。大して感じなかつたね。自分一人で働いているのと違うから。友だちがみんな働いているから、もうそういうものだと思つてね。もう、その時代というかね。

S — 今話しうかがうと、「え、凄い」とびっくりしちゃうんですけどれども。お友だちと一緒にだし……。

F — そういうのが当たり前だと思つて働いているからね、何とも思わなかつたね。

S — 働いていらっしゃる方って、年齢的には何歳くらいの方ですか？いろんな？結構年配の方も働いていたと聞いたのですけれども。

F — そうだね。だいぶあれだね。みんな子ども関係が落ち着いて、結局は友だちが働いていると、「あ、私も」ってね。みんな釣られて行く人が多かつたんだろうね。

S — じゃあ、本当にある意味、暇つぶしじやないけれども、そんな感じですね。期間も春から夏と限られていますもんね。働くとしたら、週5日間とかそういうのではなくて？

F — 違うね。雨が降れば休み。だから、日曜でもやつている時もあるしね。雨が降ればできないから、休みになるしね。

S — ジやあ、「何日に出勤するよ」とかいったシフト制ではなくて、その3ヶ月間の雨が降らない間にに行くみたいな？

F — そうそうそう。

S — ちなみに、山の天気って変わりやすいじゃないですか？仕事中に雨が降つても続けるのですか？

F — カッパを持ってるから、雨合羽。リュックを背負つていくんだけれども、中には弁当とそういうカッパは必ず持つて行つていた。

S — え、じゃあ、途中で雨が降つてもカッパを着て作業を続けるのですか？

F — そうそうそう。少しくらいの時はね。1回は、夕立になつてもやつていた時もあつたけれどもね。ある時は、仁田元の所がいっぱいの水になっちゃつて通れなくなつてね。それで、ダムの所に紐を張つてもらってね、ダムの上を渡つて来たことがあるね。

S — え、ロープ伝いで、ってことですか？危ない……。



労働 足尾の女達(伊東信撮影) | [写真裏面のメモより：足尾スコで働く女達 昭和39.9]

S | 堆積場に溜めてある、粘土質の土を乾かすための土の掘り起こし作業の様子だと思われる。植生盤とは違う仕事だが、原堆積場などでも行われていた。戦後から昭和40年代くらいまで、足尾地域内の女性たちの働き場所として、植生盤、石背負いやイッパチ、堆積場での仕事が挙げられる。選鉱所の選鉱作業や内職の話も聞く。どの仕事も厳しい労働に感じるが、野外の仕事ではワイワイ冗談を言いあい、内職では社宅のご近所さんで集まって切磋琢磨していたなど、楽しみの要素も大きかったようだ。

出だね。だって、普通の川だつたらトラックで行つたけれども、水が多すぎてトラックが通れないだろ。だから、あそこをずっとロープ伝いでね。そうやって渡つた人はあんまりいないよ。

S— ですよね……怖いですよ、実際はね。ヒヤー。でも当時はそういうものだと思つて、

F— 普通なら渡らせないからね。危なくてね。今では、思い出だよね。

……（省略）……

S— 植生盤の仕事ではいろいろな奥さんが集まつている中で、情報交換もできただんですね。

F— そうだね。方々から来ているから、いろいろな話が聞けるんですよね。

S— それはやっぱり楽しいですね。そうすると、もちろん砂烟だつたら砂烟の友だち同士だつたけれども、山に行けば違う地域の人も集まつていて、初めましての人もお話しするようになつて？

F— そうだね。中才の人も、遠下の人もね、みんなトラックの送迎があつたから集まるんだよね。

S— 1日に何人くらい作業するのに集まつていましたか？ F— あの頃は土建会社が随分あつたからね。随分あつたよ。それでみんな女の人は働いたからね。植生盤はたいがい男ってのはあんまりいなかつたからね。監督みたいに指導をする人は男じゃないと駄目だけれども、あとはたいがい女だったね。

S— 例えればなんですかれども、大変な作業じやないですか。そういうので、トラブルじゃないけれども「もう今日は疲れたからできないよ」と言うようなこととか……、

F— そういうことは聞いたこと無いね。まあ、「疲れたね」くらいはあるけれども。

S— じゃあ、気持ちよく働けたということですね。それは、もの凄く良いことですね。

F— みんな働くのに一生懸命で、あとは食べる食料の話やらね。

S— ちなみに、お昼つて何を持って行つたのですか？

F— あの頃は何を持って行つたかな。梅干しは必ず山の上だから持つて行つたね。卵だつてそんなに買えなかつたし

ね。油炒めだのそういうおかずが多かつたね。

S — と、おにぎりとかのお米ですか？

F — うーんと、おにぎりじゃなくて弁当だったかな。

S — でも、大変ですね。朝8時には家を出て、帰りが何時でしたつけ？

F — たいがい5時だね。

S — そうすると、朝は何時に起きるのですか？

F — 朝はそうちだね……だいたい5時前だね。

S — え、

F — で、ガスコンロとかがあるわけではなくて、窯で料理をしていくから、早く起きないと間に合わないがね。

S — じゃあ、朝5時前に起きて、お米を炊いて？

F — 前の夜にちゃんと準備をしておくんだよね。水を入れて、窯にはちゃんと新聞を入れて細かい木を仕込んでおいて、その上に火をつけばすぐにできるようにな。朝にそんなことをやついたら間に合わないから。

S — ジゃあ、朝に起きたらすぐに火を入れて、米を炊いて。

F — そう。そんで、今度はおつゆ。おつゆだって、七輪で火を起こしてやるでしょ。だから、昔のやり方を考えたら、今はもうまるっきり、遊びと同じようだよね。ハハ。何もしな

いと同じような、

S — ハハ、本当にそういう風に見えちゃいますよね。だって、3時間くらいかけてご飯やお弁当を作つて。旦那さんの分も作りますよね。それで、子どもがいれば子どもの分も、まあ中身は同じだけれども、お弁当を準備して朝ご飯を食べさせて、で、

F — 片付けて行かないよね。帰つて来るのは夕方だものね。S — そうですよね……で、8時に車に乗つて、炎天下でお仕事をして、夕方の5時くらいに家に。トラックに乗つて帰つて来るんですね。それで、5時にお仕事から帰つて来てからは「フウ」って一息できるんですか？

F — できないね。買い物に行かなくちゃいけないからね。三養会が夕方6時までやつていたのかな。そこで、ある程度の品物は買ったからね。だけれども、そうじやなければ仕事なんて行けないよね。

S — ジゃあ、本当に家に帰つて来たら、お店が閉まる前に買ひ物をして、で戻つて来て夕ご飯の準備をして、

F — で、食べて。で、お風呂に行って。お風呂も三養会の所にあつたからね。共同浴場がね。

S —お風呂は何時までやっていたのですか？

F —お風呂は夜8時まで。

S —ああ、夜8時まで。じゃあ、夕ご飯もかなり早く作らないといけないですよね。

F —夕方5時に帰つて来て、買い物をして夕飯をして、夜8時までにお風呂に入らなくちゃならない。大変だよ。

【お話を聞いて】

S —他の方からも、洗濯は夜のうちにやつておいたといった話を聞いた。時間の合間に家事をこなす積み重ねは、今も同じかもしれない。友だち同士でおしゃべりをしながらの植生盤の仕事は、気分転換にもなるような、季節の楽しみの一つにも感じる。

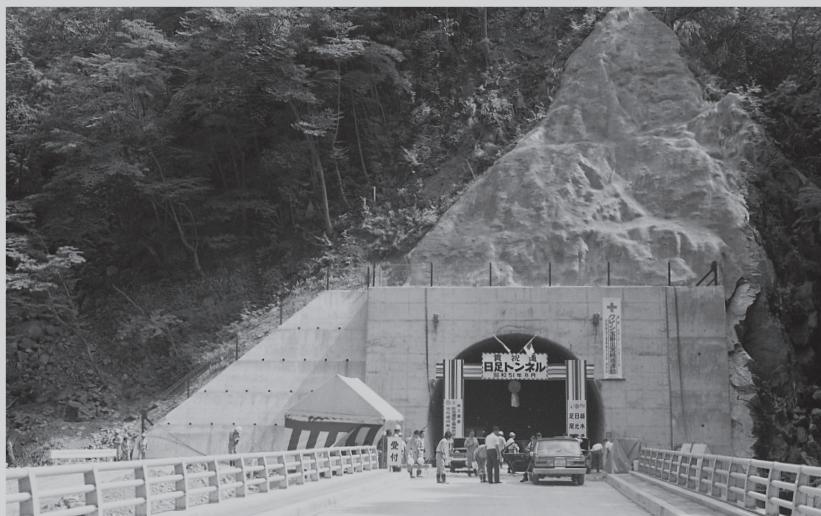
1 NPO法人足尾に緑を育てる会が毎年春に主催している、松木エリアの植樹地に実際に苗を持ち運び、植樹体験をするイベントには県内外から多くの参加者が集まる。2015年4月25日(土)、26日(日)に開催された第20回春の植樹デーには、約1800名が参加し、約8000本の苗を植えた。

2 足尾の植樹作業のためにはまず岩肌に土を運ぶ必要がある。昭和26年に考案された植生盤は土・肥料・草木の種子、切りワラを混ぜた植樹用の土の板のようなもので、これを山の斜面に貼りつけていく。この植生盤筋工作業で中心となつて働いたのは、足尾の女性たちだった。(参考：秋山智英、「森よよみがえれ－足尾銅山の教訓と緑化作戦」株式会社第一ブランディングセンター、1990年)

3 松木エリアでの治山ではないが足尾地域内の石垣を作る際の石運びの仕事のこと。お話を聞くと、当時女性の仕事が少ない中で植生盤と同じような良い仕事で、生活に困っているような女性には、役場から斡旋があつたりもしたらしい。話し手の方は、知り合いから紹介してもらったとのこと。他にも、石垣を作る際の石運びのイッパチと呼ばれる仕事があり、植生盤とは違うが山の工事などのために砂利などを運ぶ仕事もあった。

4 「坑夫」という言葉はマスコミでは用語言い換えて、「坑員」「坑内作業員」と表記する場合があるが、この冊子では、現地の方が使つてきた言葉をそのまま掲載している。

—Q7—“閉山”ってどういうことだったのですか？



祝貫通 足尾トンネル 昭和51年8月(新井常雄撮影、栃木県立文書館所蔵)

昭和48（1973）年2月28日に足尾銅山は閉山した。今から約40年前に子どもだった人も含めると、現在足尾にいる多くの方が、何かしら記憶している出来事だ。閉山前に町中でささやかれた予感や、閉山を知った瞬間、閉山後の職探しや町の取り組みなど、閉山にまつわる時間軸は長く、話題の範囲も広い。それぞれに影響があり、今にも繋がるそれらの視点は、なるべく多様な立場から集めることが大切だと思う。

ある坑夫さんにとっての閉山

私たちの聞き取りではすっかりおなじみの元機械方のMさん。語りが魅力的なのは、見落としてしまいそうな人間らしい部分がボロッと自然に現れるからだと思う。今までの聞き取りの中でもうかがうことのできたMさんにとっての閉山。

〔2014年1月10日—夫(M)、妻(F)、志村(S)、中山(N)〕
F—社宅の生活は楽しかったね。みんな仲良くなんだかんだね、あっちこっちでお茶飲みしてね。まんじゅうなんか作ってみんなを呼んだりね。

M—一年寄りたちが集まってきたよな、ばあちゃんたちが。ある時、遊びに行くと年寄り4、5人くらい集まっていてね、家族の話や、世間話をしながら「ガハハハ」つって、笑っているんだよね。……（省略）……でも閉山がなくちゃ良かったんだけれどね、閉山でほとんどの人が出て行っちゃつたんだよね。私たちの友だちは、ほとんど出て行っちゃつたよね。だけど、閉山で一つ人間が利口になつたのはさ、それまでつきあいがあつた人が、引っ越した後に足尾に来て「お世話になつたね」つて挨拶に来る人はそんなにいないよ。30人に2人くらいだよ。偶然会つてね「なんだ、ちょっとく

らい顔見せられないかな」って思ったこと、いくらもあるもん。もう他所に行っちゃったから終わりなんだよね、そういう人もいるんだよね。友だちでもなんでも、親しくしてても。あー、人間って案外薄情なんだな、って。

S —うーん。……(省略)……閉山の時にMさんが家族で残ろうと思った理由は何だったんですか?引っ越しした方が多かった中で、足尾を出ようとは思わなかつたんですか?

F —ま、できたら足尾に残りたいって。うん、私は思つた。

M —やっぱりこつちはね、いや、行けたは行けたのさ、小山かなんかへね。家族の誘いもあつたしね。だけどその時には銅山で仕事が見つかつたから。俺は、閉山から8ヶ月くらい坑内に入つていたんですよ。まだ坑内に残務整理で。だから、向こうの会社に席をおいて、：坑内では5、6人で残務整理やつたんだわ。坑内の荷物降ろしたり、ポンプの線を切つたりして、坑内の中が水で埋まるまでね。

S —なんかその作業っていうのも凄いですね。

N —全部埋めたなんですか?

M —ほとんどね、だから何十万円もするような機械も坑内にはまだあったから、「この中の機械を出してくれたら、一人



砂畠社宅解体中(伊東信撮影)

[写真裏面のメモり:一棟5000円売った 49.3.17日 俺は二棟買った 色々に便利する 材料買ひに来る人も 何日も居た]

数万円ずつやるぞ」と言われたから、「じゃ。出しちゃうか」つてやろうとしたこともあるよ。そしたら、「怪我でもしたら、大変だから止めてくれ」つてことで止めたんだけれどもね。

だから、坑内に置いてきた機械がだいぶあるよ。何千萬つて。「だからおまえら、ほら一人頭5、60万はなるからな」つて

言つたんだよね。……（省略）……だから最後は、「じゃあ

今日はここ、明日はここ」つて、モーターのケーブル線を切つたり、電気を切つたりね。みんなスイッチを切つたら、止まって終わりだからね。もう水が入つちやうから、それを最後までやつてきたんだよ。「これで終わり」つて言つて。ハハ、

S 一本本当に最後の最後ですよね。

M 一その最後をやつている時に温泉を掘つたのさ、今の「かじか荘」の。「かじかの温泉が出るまでがんばつてくれや」つて。このボーリングをどんどんやつて、初めてお湯が出たんだよね。お湯はあつたんだよね。下にも。だから坑内に入つた時だつて「帰りには温泉に入つていくか?」なんて、ドラム缶の温泉に入つたりして、帰つて來た。

S あ、坑内の中てつてことですか?

M 中で、ハハ。お湯がボーリングを掘つた穴からどんどん

出ているんだから、坑内の中で。そういう所にドラム缶を3つ置いて温泉にしていたから、そこに入つてから、坑外に帰つてきていたんだよ。

S 凄い!

〔お話を聞いて〕

S 引つ越した方を見かけた話は、足尾に残つた側の素直な感情だと思う。同時に足尾を出なければならなかつた人は、気軽に声を掛けにくい気持ちもあつたと想像する。どちらの言い分もわかるようで、歯がゆいような何とも言えない気がする。残務処理の話は壮大すぎて理解が追いつかない所があるので、もう少し聞き貯めたい。

N Mさんには以前から、閉山によつて人々が足尾を去る様子を聞いていたが、当時は混乱の中、毎日のように慌しく人々が足尾を出たのだと想像される。きっと気持ちの整理なども追いつかないままのことだったのだろう。閉山は足尾に残つた人々にとつても、足尾を去つた人々にとつても、生活を激変させた出来事なのだと思う。

【2014年3月5日】夫(M)・妻(F)・志村(S)・中山(N)

M—俺は、閉山後の半年くらいだったけど、坑内の工事やつ

ていたから。それで閉山後に新しい職場に行つたら、「お前

誰だ?」って言われたもんね。お母ちゃんが電話をしたらさ、

「そんな人はいねえ」って言うんだもん。「Mですが、今どこ

ですか?」って聞いたら「そんなMなんていうのはいないよ」

なんて。たまげたよな。職場が変わつてから1年くらいは、

会議がある時ぐらいしか顔出さなかつたから。だから馴染

みの人が2人くらいいるんだけど、「嫌になつちやうよな、

行くとな」なんて言つたりしたね。……(省略)……働いて

いる頃はまさか、頭丸坊主でき。ハハ、鉢巻してやつていたか

ら、「目置かれていたんだよね。それで、職場内で弱い人が

いじめられないと、その人のことを親戚だつて嘘を言つちゃ

うんだよ。「親戚だぞ、あんまりあれしないでくれよな」って

言うと、次の日から変わつたみたい。ハハ。そういうのだもん。

……(省略)……

M—だから坑内の仕事とは違うよね、坑内つていうのはど

ういうのだんべな。

F—やっぱり、気が強いつていうのかな。ほら、命が危険で

すよね。

S—あー、

M—こんなこと言つたこともあつたよ。「お前、坑内の横間歩
〔1〕入つて7時間でも8時間でも仕事してみろ、担架に乗つ
て帰つて来るようだよ」ってね。坑内で2時間も仕事をやつ
たらもう汗でびつしょりなんだよ。仕事をする場所なんか、
もう真夏なんてもんじやないからね。シャツ1枚着ていたつ

て、ものの1時間もすれば汗だくになつてシャツを絞るよう
だから。「おまえそういう仕事したことあるか?」って。毎日
命がけだよつて。「だから違うんだよつて、お前らと」つて。
……(省略)……

M—他所の炭坑で働いていた係長が職場にいたんだよ。そ
の人の炭坑が閉山になつたから足尾に來たんだよね。坑内
で事故があつた時にその人が「Mさん、やつぱり坑内だね。
俺、炭坑にいたけれども、やつぱり違うわ」って言つていたね。
坑内で働いている俺らは仕事中に、友だちがぶつ倒れたり
うと、飛んで抱えてくるがね。血なんかが出ていても坑内で

見つけたりすればね。例えば癲痛(てんかん)の人が倒れているだろ、みんな「うわー」って逃げちゃうんだから。だけど中には、「何やつているんだ」って助けに行ける人が何人かはいるよね。やっぱり、そういうので気の強い人はいるんだね。それで、初めて「Mおまえ、初めはわかんなかったけれども、凄いな。あの血だらけになった友だちを抱えてくんだもんな」なんて言われたんだよね。……(省略)……でも、自分の体(せがれ)がなんかだとしたら、やつていられないべなうて思つたんだよ。本当のこと言うと、だから、気がなんだかっていうか、わかんないな、そういうことあつたよね。……(省略)……

N 一山の男かっこいいですね。

F 一いやあ、山の男ね。坑内はね、私らもよくわかんないよね。

M 一みんな怪我しても、炭坑の人はみんなで助け合つたんだよね。そうすると、「Mさんは、山の人だな、やっぱり坑内の人だね」って。……(省略)……坑内と炭坑とかで働いた人はみんな、何か事故があれば引きずり出したりして、助け出す人が多いつて。「山で命張っているんだよね」なんて。

鉱山で働いている人は、そうやつて助け合つているんだよね」なんて。

N 一今こう、うん、うん、って聞いているけれども、自分がその立場になつたらどうなんだろうって思つちゃうもん。……(省略)……

M 一閉山になれば、それは凄いよ。子どもだって影響しちゃうよ。「親父、なんで引っ越さないんだ」なんて言い出したりしてさ、「大丈夫だよ、俺は。家(うち)はこうだから」って言つたりしてさ。だから近所にね、「いいね、Mさんは仕事があつから」って言われたり、憎まれたりな。「なんで、ああなんだよ」って。……(省略)……斡旋先の会社見学があつて、「こに行つて、見てくれよな」って言われて行けば、「いいですよ、いつでも来てください」って言われたけれど、「そんな所まで行けつかよ」って帰つて来たりな。……(省略)……東京に職場見学に行つた時に、吉祥寺に古河の寮があつたから、帰りにみんなで泊まつて來たんだけれども、そこに他の炭坑から來ていた人が「いやあ、足尾はまだ閉山が決まってないから良いよね」なんて言われて、切ない気持ちだったよ。……(省略)……

M 一最終的には「足尾で働けや」つてことで、足尾に残ることになつてね。閉山で、周りは一軒一軒引っ越して行つちやう

なんだもんね。かわいそだよね。その度に引っ越しを手伝つてな。閉山で退職した人は、退職金などを元に引っ越し先に家を建てた人もいたんだよね。その人を手伝いながら、「なんだ、こんなに良い家に引っ越すんだ」って考えていたんだよ。で、後から訪ねて行くと「20年もたつたら、ガタガタになつて家に入れないよ」って。そういう造りの家なんだね。大急ぎで粗末な唐材で作つたような家だから。

S—そんなことあるんですか？

M—うん、だから2階なんて風が吹いたら響くようだとか、「まかされて買ったんだか」「Mちゃん、来なくてよかつたよ」なんて言われてさ、「なんで、良い家だべ」って言つたら「良い家かな？段々住むようになつたら、10年も住んだら、2階なんて搖れるような家だ」って。……(省略)……やっぱり惨めだなつてね。本当に、足尾の人は大変だなつてね。

【お話を聞いて】

S—坑夫の仕事感は消滅してしまつたんだなどじんわり伝わる。足尾以外の鉱山の人や足尾を離れる人、残つた人、それぞれに影響があつた。私は足尾を離れた方の話を聞くこと

はできないし、よそ者が安易に聞けるものでもない気がするけれど、足尾に残つた人・出た人の関係はどういうものなのだろう、と気になつた。

N—Mさんの言葉からは、一緒に働いた仲間たちを懐かしくむ、また仲間たちと離れてしまつた寂しさのような気持ちを感じ取ることができた気がした。

【2015年5月21日】—夫(M)、妻(F)、志村(S)、中山(N)】

M—だから、残務整理をやつたのは10何人かだからね。

S—え、足尾の中で10何人ですか？それは凄い少ないですね。通洞だけで？それとも本山とか全部合わせて？

M—全部あわせてね。残務整理つていうか、ほとんど、要するに会社から「ポンプのモーターを上げるのに残つてくれ」とかね。

N—どのくらいの期間がかかつたのですか？

M—だから、初めは「4ヶ月か？」って言つたけれども、俺は半年以上。……(省略)……

S—その残務処理をやることになつたのは、閉山前後に、

「やつてくれ」みたいな話があつたのですか？

M — そうそうそう。もう閉山で、みんな仕事がね。「お前は、どこどこのセメント工場ではなく、鉄管工場に行ってくれ」とかね。仲間にやつたりね。「それなら、俺が行くよ」「駄目だ」「いや、待つてくれ」とかさ。そういういろいろなのがあつたんだよね。……（省略）……だから、主に機械方が足尾に残って、残務整理つて坑内に残っている巻き上げ機とかをばらしたりね。閉山の日は俺はいなかつたんだよ、その日からパタンと今度は誰もいないから。

N — その様子が、だつて銅山で働いていた時は、音だつたり、人が作業している音とか、巻き上げる音とか、凄い想像ができるんですけどれども。

S — 賑やかでしたよね。

M — もうなにもない。もうその日から誰も入らないからね。

S — じゃあ、もうシンとしていたんですか？

M — シーンだよ。ただ、水が入るから。坑内の水が下にどんどん溜まるから。……（省略）……だから、周りをこう決めてさ、「1、2、3でお前が今度巻き上げのポンプの運転やつてくれ」と役割を決めて、かわりばんこで仕事をやって

いたね。……（省略）……残務処理では、坑内の中に残っている機械もそのままにしておいてケーブルだけは上げちゃうんだよ。ブツンつて切つてね。それで、ケーブルを切つちゃうと、もう時間との問題なんだよね。水がくるから。

S — 私、ちよつとわからないのですが、水がどんどん入っちゃうっていうのはどういうことですか？

M — そこらへんの河原で穴を掘つているのと同じで、段々掘つて行くと水が出てくるがね。

S — で、閉山前まではその水を排水していただけれど、そうやらなくなつたから水が溜まる。

M — 雨が降る訳だがね。それが全部入つている訳だよ、坑内に。だから中には、水が滝みたいになつてゐる所もあるんだよ。

S — 坑道の中で？ 滝？ ハハ、

M — あの、でかく掘つちやうがね。そうするとてつかい滝になるんだよ。「あれはなんとかの滝だ」なんて名前がついているんだ。……（省略）……

〔お話を聞いて〕

S — 使われなくなつた坑内は空洞ではなく、水が溜まつてい

るというのは、予想外だった。聞けば聞くほど、更に坑内の謎が深まる。Mさんが坑内について語る時には、擬音や何とも言えない言葉で表され、わかるような、わからないような…。壮大な空間、閉山後のシンとした空気感、坑内に水が溜まつて行く様子や滝の流れる音は、言葉や文字で置き換えることは不可能な世界なのだろう。

N—Mさんの記憶にある坑内の風景を、そのまま映像や絵か何かにしてじっくり見てみたい—それが、残務整理のみならず坑夫さんの仕事をMさんから聞き続けてきて一番強く想うことだ。まさに想像を絶している…。

残った人はいない

【2014年1月20日】夫(M)、妻(F)、Faさん、志村(S)、中山(N)

あるご夫婦から紹介していただいたFaさんは、山形県の永松鉱山閉山【2】がきっかけで中学生の頃に足尾に引っ越ししてきた。2つの閉山を経験した方の視点。

Fa—私は、昭和36年の5月に永松が閉山になって足尾に来たんですよ。まだ春先の中だけれども、山形には雪が

沢山残っていたので、雪の中を歩いてきたんです。お友だちが「さよなら」って、みんな段々にいなくなっちゃうんですね。順番に銅山を出るでしょう。いつぶんに出ないからね。

みんな行き先が決まって、順番に出るんです。……(省略)

……そんなことで、「さよなら」って、5月に電車に乗つて足尾に来て、通洞駅に降りたら道がとにかく広くてびっくりした。通洞駅の階段を降りて、下降りたらもう広くてびっくりしました。で、砂畠の社宅の風景も凄かつたんですね。けれどもね、3列で、「い・ろ・は」と並んでいてね【3】。私は、その中の「ろ」列の一番最後の方の社宅に住んだのですけれど、そこまで行く距離が長かったです。ずっと歩いて。あんまり広くて、道が長くてね。

S—足尾に来られたのは、親戚がいるなどのきっかけがあつたのですか?

Fa—その時残っていた、古河の関連鉱山だった飯盛、久根【4】、足尾の3つの鉱山から選ぶように古河の方から言われて、それで父は山形に近い方が良いと思って「んじゃあ、栃木の足尾でいいか」と決めて。引っ越し先は、古河からうち、あつちつて指示されたのではなくて、選べたらしいですね。

N — 和歌山も静岡にも鉱山が：？

Fa — そうです、古河の鉱山です。永松では私のクラスは20人くらいいたのかな、同じ学年が。それで、閉山でいろんな所に分かれて、足尾に来たのが2、3人だったんですが、結局、今の足尾には私しか残っていないです。引っ越した先の飯盛も久根もその後に閉山になって、で、みんな足尾に来た人もいれば、他の仕事を見つけた人もいるし。足尾は一番最後に残ったんで、父の選択は正しかったのかなって思うんですけどもね。結局足尾も閉山したけどね、私は足尾の地の人と結婚したので、ハハ。足尾が良かつたのかなと思うんですけども。でも最初はあれでしたね、言葉も違いますし。だからどうしても中学1、2年は内気で。元々内気な性格だったので、人と交流ができなくて淋しかったです。でも何人かお友だちができるんですね。今でもその人たちとは、お友だちです。……（省略）……

S — 『いつて、いつも言うんですよ。帰れるふるさとが無いんですね。』

Fa — 全然聞いていない、引っ越した先として、3つの候補地から選ぶことになって、一番近い足尾に決めたんですね。何もわからず、親の言うところについて行くだけでしたね。どんなところかも調べもしないしね、小さかつたしね。そんな感じでしたね。

M — そこに、残った人はいたの？

Fa — 残った人はいないです。最後まで残った人は、最後まで誰かはいたとは思っていますけれども、結局は閉山で。その、民家がないから。全部古河関係の社宅や持ち物ですものね。……（省略）……

S — そのFaさんが住んでいた山形の鉱山も、閉山で残ることができなくなっちゃつたってことですよね。

Fa — そう。全部、それにそこはお店も全部古河。足尾でいふるさとを離れないでずっといられるっていうのは良いですね。私はいつも思うんだけれども、主人が羨ましい。だって、ここで生まれ育つて、ずっとここにいられるんだもの。まあいろいろ変わるけれども、ね。「私にはふるさとがある」といって、いつも言うんですよ。帰れるふるさとが無いんですね。

かく民家が無い。全部古河の人だから。全部って言つても、まあ出て行くのは徐々にですけれども。だから私が足尾に来た時には、全部いっぺんに「さよなら」じゃなくて、徐々に髪の毛が抜けるように、「一つ一つ抜けていた。そうやって、人が出て行つたんです。だから、最後がどうなつたのかは私もわからぬ。

S 一ちなみに、足尾と山形で全然状況が違うと思うんですけれども、足尾で閉山になつた時に、山形の閉山と重なる部分つていうのはありましたか？

Fa 一全然ないです。

S 一そうですか。

Fa 一足尾は閉山になつたけれども、みんな外に出て行く訳ではない。社宅の家からは引っ越しましたけれども、足尾に残りましたね。……(省略)……

F 一今市や大間々に行くとね、なんかね「うわー、なんでこんなに空が広いんだろう」とてね、すごくストレス解消になるんですよ。足尾にいるとね、とにかく空が狭いんですね、もう山がね。「いやあ、空はこんなに広いんか」と、解放されるというか。だからね、たまには気晴らしに良いんですけども。

【お話を聞いて】

S 一「永松と足尾の閉山は重ならない」と即答していたのが印象に残っている。足尾だけではないということを、強く意識させられた。Faさんの話は、永松鉱山の雪や、山の豊かな自然の

Fa 一ずっと嫌だね。足尾がいいですね。

F 一帰つて来ると、今度は山に入ると安心感がね。神子内(みこうち)まで来ると安心感があるんですよね。向こうの今市に行ってから、戻つて来るとやっぱり足尾がいいなと思うんですけども。でも Faさんのふるさとの話を聞いていたら、もっと足尾を大事にしなくちゃと思いました。

Fa 一私もね、最初は足尾が好きになれなかつたんですけども、神子内にお嫁に行つてから、家の周りが山の中だから。周りに山形と同じような自然があるんですよ。山菜もあるし、春になつたらそれこそゴゴミ、ゼンマイ、ワラビ、フキノトウも出るしね。ここじゃ、町ではそういうのはあんまりね。だから神子内にね、お嫁に行つて良かったなと。ハハ。いくらか永松にいたような感じが味わえているから、良いのかなと思って。だからね、今は足尾が大好きです。

生活の話が多く、それほど跡形もなくなってしまったふるさとの想いが強いのかもしれないし、もしかしたら現実離れとなつてゐるからこそ、綺麗な記憶として残つているのかもしれない。

N—Faさんは一度も閉山を経験し、きっと多くの寂しさや辛さを知つているのだとと思う。そんなFaさんが話すふるさとへの想いには重みがあった。ベッドタウン育ちの私にとって、無機質なコンクリート、他人を気にかけない人の距離感、電車や車の音、好き嫌いは別にして、その空気が一番安心する。でも今では、宇都宮インターに入つて山に向かう時、日足トンネルを通つて山に入る時、「帰ってきた、落ち着く」としみじみと感じる。私も足尾が大好きだ。

共同浴場での親切

【2014年10月24日】—Mさん、志村(S)、中山(N)、好井(Y)】

昭和30年代に坑内で働いていたMさんは、労働環境のあり方に違和感を持ち、組合活動に加わった。その後、突然解雇となり、それを不服として仲間とともに裁判を行う【5】。Mさんにとって、閉山前後と、解雇されてから苦労し、やりくりしていた時期は、重なつてゐる。

S—同じ坑内の仕事をしていても、喫飯所で休憩したり、仕事後にお風呂に入れないような人たちがいたのですか?

M—そういう人たちは組夫【6】なの。何でもやる。間接の方【7】はずつとは、やれない。技術があるから自分の専門分野の仕事をやつていたの。組夫は分野が別れていないので、仕事を全行程を一緒にやるっていうね。だから仕事は大変だったね。だから働く場所も条件の悪い坑内の下へ下へ行ったからね、湿度の高い所とか。気の毒といったら氣の毒、その点があつたよな。だから帰りは、作業員が濡れたら濡れたで帰つてくるでしょ。そうすると、普通の工員の人は帰つて来たらちゃんとお風呂に入つたり、下着を取り替えて帰るでしょ。

組の人たちは仕事を終わつて坑内から出ると、お風呂に入れないんです。だから乾燥室も使わない。お風呂と乾燥室がそなえられていて、ちゃんと作業着を乾燥室に入れて、お風呂に入つて自分の脱衣所で着替えて帰つて行くんだけれども、組夫の人はないんですよ。直接自分の家に行くか、飯場【8】に行くか。私がある時、仕事帰りに、組夫の人たちと一緒になつたことがあるんですよ。中には、坑内からどう

やつて帰ればいいか聞く人がいたんですよね。……（省略）
……坑外への帰り方が分からぬわけ。坑内は分かれて
いるから、入り組んでいるから。そうすると、「俺帰るから、
じゃあ一緒に帰ろう」ということで一緒に帰つたりね。
……（省略）……

M—私が組合支部の執行部に入った時に、運動方針の中
に、社外工も個人の組合員として入れるという内容を加え
たの。そして、昭和41年に解雇されたんだす。……（省略）

……そのハイクロウ「9」とか警察沙汰になつた人とかが対
象だと聞いていたんだけれども、25名の解雇通知の中に私
の名前も入つていたんですよ。……（省略）……解雇とは、
次の日の生活を奪うということてしまよ、仕事がなくなると
いうことはその人の生活が無くなるわけだから。ところが、
まさかね、自分たちがなるとは思わないよね、ハハ。

S—本当にびっくりという感じだつたんですね。

M—解雇されてからは、今度は仲間で意識的に疑つちやう
んですよ。例えば、通洞の共同浴場に入るてしまよ、そうする
と私が行くとお風呂から出て行つちやうんですよ。

S—えー、嫌だな、そういうの。

M—私が風呂に入つていくでしょ、そうするとみんなが下
を向いてサーッと、ぱつんぱつんと風呂から出ちやうの。俺
としゃべると支障が出るんじやないかと思つて、避けるんだ
よね。猜疑心になつちやうの。ほら、私と何かしゃべつたら、
その人が何か言われるんじやないかって。何か支障が出る
んじやないかな、ってね。本当にあれだつたよ、最初は。

S—そういうのがあるんだ…。

Y—それ、やっぱり昭和41年くらいからあたりでしたか？

M—そうですね。

Y—その前はそういうことはなかつたですか？

M—ないです。そういうことはないです。我々が解雇
されてからですね。それで、今度はお風呂の券を作るよう
になつたんですよ。社宅の共同浴場の券、

S—あ、じゃあお風呂に入るのに、無料じやなくなつちやうつ
てことですか？

M—うん、結局、解雇された私たちが入らないように、券制
度になつた、月別に。そのお風呂の窓口の人、いわばね、お風
呂場の管理人がいるんですよ、昔は。その人が窓口にいて、
券に判子を押すんですよ。そうすると、解雇されてしまった

から、私の家は該当されないんですね。そうすると子ども券もないんですよ。でも、子どもにはそんなの関係ないがね。そうするとその人はいい人でね、子どもが風呂に行く時に、誰かが券を忘れたとすると、わざとそれをとつておいて、家(うち)の子どもの名前を書き換えて、子どもに渡したの。子どもはそういうの、全然分からぬから。そういう中で、そやつて守つてくれた人もいる訳。……(省略)……他の例だと、社宅の中の本通りがありますよね、そこを歩いていて私の姿が見えると、通る予定だった道を変えてすーっと違う道に行つちやうんですよ。ハハ。顔を見るも駄目。……(省略)……裁判が始まって判決が出て、だいたい筋がわかった頃に、ある人が「ただ、なんて言つていいかわらなかつた」って。「嫌で避けたのではない、激励していいのか、慰めの言葉を言つていいのかわからないので、私は避けていた。かわしていたんだ」っていう話をされたね。それを聞いて、ちょっと救われたけれどもね。

【お話を聞いて】

S — 裁判の実体験を聞き、自分が持つていた裁判に対するイ

メージが大きく変わった。とにかく、エネルギーが必要で、維持するのは並大抵のことではない。Mさんはあつけらかんと苦しい時期の話をしてくれながら、当時の問題点が次から次へと熱く発せられ、時間がたつても收まらない気持ちを感じた。お風呂でのそれぞの反応・対応は、自分もやつてしまいそうである。本当に辛い時の優しさや、弱い立場の人の側に立つということ、人が見ていらない場所で人柄が現れることを、よく表している例が沢山あった。

N — 裁判が行われている時は、古河の従業員の人たちにも複雑な想いがあつたのだと思う。Mさんも大変な疎外感を持ったのだろうと想像する。そんな中、最後まで裁判を行えたのは、仲間の存在や、日常に感じる些細な人の優しさが大きな支えであったのだろうと思う。

Y — 銅山で労働運動を熱心に進め、閉山前に突然解雇され、その不当性を訴え、長年裁判闘争をしてきたMさん。初めて聞き取りにうかがつた私も気さくに受け入れ、ぶしつけな問い合わせにも快く語ってくれる。彼の語りからは、解雇されたことへの憤り、不正への怒りが透けてみえる。しかしMさんの語りで印象深かつたのは、解雇された自分とどのようにつ

きあっていけばいいのかという当時の周囲の人びとの戸惑いを思いやり、気づかうMさんの優しさだ。

現役の消防団員

【2015年5月10日—Mさん・志村(S)】

現在60代で消防団員を約50年続けていらっしゃる方のお話。

M—昭和50年代の消防団は、県の操法大会【10】では1、2位だからね。

S—そうなんですか、県の中で1位か2位を争うほど…。それは、足尾の消防団が優秀だったということですね。人も

沢山いたし、訓練とかも一生懸命やっていて技術が高かつた？ M一部が沢山あって、そこから若い衆を集めてやっていましたよ。大会にもたいがい行くからね。足尾の場合は、結構、頑張っていたから。

S—町の人も安心というか、凄い誇りですよね。消防団の人たちも。

M—昔はほら、消防分署っていうのがなかったから。プロがいなかつたから。冬場なんかは詰所に詰めてね、毎日交代

でさ。冬場は、今の通洞駅前にあつたんだけれども、夜は詰めてね。今は楽だよね、やっぱり。昔と変わったことは、消防団員による夜勤がなくなつたということですね。泊まりに行かなくて良いから。一冬に多い時には10回以上かな。そこに行って、朝に帰つて来てから、そのまま仕事に行つたのさ。そういうのもなくなつたから樂だよね。

S—かつては県で1、2位を争うような消防団で団員も沢山いた時から、閉山や人口も減少して、現在になつているんですけども、昔から今にかけてどう感じられますか？ 改めて思うこととか…、

M—改めてつても。なにがなんでも、あれだよね。人口が少ないっていうのがあるよね。人口が増えればさ、若い衆が増えればさ、俺らも消防団員をやらなくて済むんだよ。

S—フツ、

M一笑われちゃうよね。はつきり言うと笑われちゃうよ。

俺らが消防団員をやつているなんて。年金生活をしているのにさ、消防団員をやつしているなんて言つたら笑われちゃうもんね。「関心する」じゃなくて、笑われちゃうよ。

S—でも、やっぱりそうせざるを得ないっていうかね、今それが

M — そなへんだよ。動けるうちはさ、

S — 活躍していただきて。

M — 「動ける」つて言つても、やつと動いているんだけれどもさ。

〔お話を聞いて〕

S — 終始、笑いながらユーモラスに話が続いたが、「こんな歳でも、消防団をやつていてるなんて笑われちゃう」と言う一言には、今のいろいろな足尾の様子が示されている。この日の数週間後、一人暮らしのお婆さんの家が火元の火事があり、そのお婆さんは亡くなってしまった。火災にすぐ対応できる体制の維持がますます難しくなっていく中では、お話をとおり、歳だからといって消防団を抜けることはできないのだろう。ちなみに、協力隊に着任した当初から消防団に加わったNさんは3回の消火活動を経験していて、凄いなあと思う。

番外編「消防団に参加していく」

N — Mさんの言うとおり、足尾消防団は人員が不足し、また高齢化が進んでいます。これは深刻な問題で、若者の入団と世代交代が必要であることは、間違ひありません。しかし、個人

的なわがままを言えば、大先輩の団員の方々には、是非、体にムチを打つて、まだまだ団員として活躍していただきたいです。

おつかない団長と副団長には規律を学び、副分団長には節度を学びました。分団の方々も、いつも私のことを気にかけてくれます。部では陽気な分団長、優しい部長、実はいつも真剣なMさん、みんなに消防のことだけでなく足尾のこと、人生のことなど、多くのことを教えていただいています。とっても楽しいです。だから、(怒られそうですが)カツ「いいおじ様方には、これからも頑張っていただきたいです。

引っ越し前の美容室

【2015年5月27日】— Fさん、志村(S)】

昭和20年代に美容師の修行に出た後に、足尾で美容室を開業した方。銅山ならではのお客さんの様子や、女性目線の店や町の話題の中で、閉山の一場面も語られた。

F — 美容室は夜もやつていたけれども、テレビがどんどん普及してからは、夜のお客さんが少なくなつたよね。昼間は結構やっていてね、それで閉山になる時には一日に何十人やつ

たのかわからないよね。みんな出て行く人で。足尾から出

て行くから、

F — 最後に髪を切る、ということですね。

S — うん。パークをかけて、みんな綺麗にして出て行つちやつた。

S — えー、そななんだ。ちゃんと引つ越し前に髪を綺麗にしてから、奥さんたちは出て行つたんだ。

F — うん、出て行つたもんね。だから美容師の私は手を使ふだろ、手が痛くて筋肉痛になつたよ。

S — それほど、沢山の人が引つ越し前に髪を切りに来たんですね。閉山のことは、あまりイメージとかできないんですけども。どんどん人が引つ越しで行く中で、でもそうやってパークをかけて出て行つたんだと思うと、なんかな…。髪を切つてもらう時つて、お話をしたりするじゃないですか。

Fさんも、お話しながら？

F — その時だつて、話をしながらやつたけれども、

S — どういうお話をしていたんですか？

F — 「閉山で他所に行つてから、体に氣をつけなね」とかね、いろいろなうわさ話がありまつたよ。新しい仕事先では、勤務時間が長いでしょ。だから随分苦労して、嫌で帰つて

来た人もいるし、大変だつたみたい。

S — ね、きっと美容室に来る奥さんたちは、奥さんたちなりの心配とかが、いろいろとあつたんでしょうね。

F — そなそ、あつたからね。新しい所に行くんだからね。でも、向こうに行つて、向こうの人と仲良くやつてゐる人もいるけれども。逆に、なんか意地悪された人もいるみたいよ。話の様子では。

F — 水とか、どぶがとか、なんかいろいろ話を聞いたことがある。

S — どぶ？

F — うん。どぶが使えなかつたり。水底に使えなかつたりとか。なんかつて意地悪されたつて。

S — 新しく来た人つていうことで、受け入れづらかつたんですかね。

F — いろんな所があつたみたいね、里もね。小山の方へ行つたり、埼玉の方に行つたりして、いるんだよね、みんなね。

S — なんか、その閉山になるとわかつて、そうやつて、奥さんたちがパーク屋さんに殺到している時に、Fさんはどういう

気持ちだったり、どういう風に感じながらお仕事をしていったんですか？

F — だから行っちゃってから、お客様が少なくなっちゃうしさ、あれかなと思ったけれども。だけれども、行ってから何年ぐらいだろう、何年かはまあまあ良かつたけれども、だいぶ少なくなっちゃって寂しくなったよね。それでほら、みんな同級生なんかも行っちゃうし。だいたい私たちと同じくらいの年代の人が行っちゃったから。だから寂しかったよね。今になつてその人たちが同じくらいの歳だから、「どうしたらうね」と聞いてみたりするけれどもね。

S — 閉山の時か。想像がし尽くせないな。

F — そうだよね。その時に足尾にいない人にはわからなによね。

「お話を聞いて」

S — 引っ越し前に髪を切る奥さんの様子は、妙にリアル。また、どぶの掃除といった細かい部分での不都合に気づくアンテナは、女性ならではの情報収集力。そういう嫌な部分はずつと覚えている気がする。いろいろな所で足尾から引っ越した

方が話題になるが、その人たちそれがどうだったのか気になるけれども、全くイメージができないままだ。

社宅から見た、閉山から今

〔2015年6月28日—Fさん、志村(S)、好井(Y)〕

社宅に閉山後も暮らしていた奥さんのお話。

S — 閉山のことはなかなかイメージできなくて、本当にいろんな人が突然足尾を離れて行つたと思うんですが、Fさんの周りの方はどうでしたか？

F — 他の所は影響があつても、近所さんはみんな同じ場所に勤めていたから、定年までいましたよね。

S — あ、じゃあFさんや周りの方は、大丈夫だったのですね。ただ、引っ越しとかはなかつたけれども、同じ町で閉山の影響があつたということは？

F — そうそう。ちょっと寂しかったですよね。だから「いづれは…」って気はありましたけれどもね。

Y — それは社宅の人はやっぱり、どんどん人がいなくなつていくという？

F —ええ、近所では引っ越しさなかつたんで、そんなには感じなかつたんですけどね。

S —『閉山』はよく話題になつたのですか?

F —ええ。寂しかつたですよね。

Y —やつぱり、こう、町全体を見たら、どんどん変わつたという印象はありますか?

F —ええ、ありますよね。お店も段々と少なくなるし、人も少なくなっちゃいますから。だから、そういう寂しさはありましたよ。段々と、本当に人口が少なくなるからね。

……(省略)……

S —閉山になつて数年経つと、閉山後の3本柱で、観光開発や企業誘致を始めたり、日足トンネルができてきましたよね。そういう変化っていうのは、どう生活に影響があつたと感じましたか?

F —私の、のんきね。あんまりそういうのを感じなく過ごしてきましたけれども。でもね、よく出かけるのに、細尾峠があつたでしょ、山を回つて行くからね。車を買ってから、何回か行きましたけれども、トンネルができたら、不便だった所

から便利になつたんですね。日光方面が通れないし、鉄道

の足尾線だけになつちゃうでしょ、一方方向になつちゃうでしょ。だから、「足尾は孤島の土地になつちゃう」なんて心配したんですけども、トンネルができるたらうんと変わりましたよね【11】。

S —実際、日光の方と桐生の方で、トンネルができる前後で行く回数というのは変わりましたか?

F —桐生の方へは年中行けたけれども、日光・今市方面はあんまり行つたことがないから、うんと遠いように感じたんですよ。

S —ああ、やつぱり。

F —日光の方へはあまり行かないんですね、山を越えて行くのに大変だったから。……(省略)……だから、トンネルができる頃は、そういうような感じでした。日光は遠いような感じでした。桐生の方が多かつたですね、桐生、大間々とかね。

S —学校とかも、例えば高校生とかは、桐生の方に行くか、あつたでしょ、山を回つて行くからね。車を買ってから、何回

F —そうですね。

S —それを考えると、日光市に合併したって凄いですよね。



〔アルバム内のメモより〕

表紙に記述：

足尾通洞解体始める。

平成10年2月21日より写ス。

社宅解体後にマンションが立つ。

裏表紙に記述：

思い出の社宅が消える。

F6マンションが出来た。

変わり行く通洞F3近く二棟出来る。

通洞社宅跡にマンションが出来る。

平成10年9月15日



平成 10 年 11 月 15 日 伊東信撮影



平成 10 年 2 月 21 日 伊東信撮影

F — そうですね。今は日光の方にばかり買い物に行くから、日光の方が近いように感じますけれども。今はちょうど乗り物が不便になつてきているけれど。
……（省略）……

Y — さつき、閉山の話をうかがつたんですが、例えば閉山の後に三養会のサービスが変わったとか、そういうのはありますか？

F — 段々と品薄になりましたね。愛宕下（あたごした）の三養会がなくなつて、今度は赤倉がなくなつてつていう。今なんて2つだけです「12」。閉山後は、段々と本当に、目に見えるよう寂れて行くのはわかりましたけれどもね。

S — なんか、漠然とした質問になっちゃうんですけども、今つて本当に三養会が2つしかなくて、お店もポツンポツンじゃないですか。どう思いますか？

F — 若い人たち車だから、年中買い物に行つているんですけどもね。今ね、コーポが来ているでしょ。そういうのが来る時に一緒に頼んでいるんですけども。うん。ここらはお店もないしね、不便です。

F — でも、あそこに足尾双愛病院ができただのでうんと助か

るんですね「13」。桐生まで、病院に行つていたんですよ。くなつちゃたので、足尾双愛病院ができたので助かりました。
S — やっぱり、あそこに入院されている人も沢山いらっしゃいますもんね。

……（省略）……

F — 閉山前の社宅での生活で覚えていることはありますか？

F — 飲み会で、隣が喧嘩している時があるの。そうすると奥さんが「Fさんちょっと、家（うち）の人が喧嘩始めちゃつたから、止めて、止めて」とつてね。みんな背が高い人ばかりで、お父さんは小柄だったものだから、「やだ、家（うち）のお父さんが行つたら飛ばされちゃうよ」とか言つたけれども。今となつては楽しい思い出ですね。そういうことがありましたけれども、社宅から引っ越してからは本当にね、「しばらく見ないけれども、あの人は元気ですか？」とか言われたりね。だから、「誰々さんがあれなんだけれども」なんて言つ

たりね。……(省略)……あんまり話っていうのも出ないですもんね。昔はね、社宅にいる時は「いるー?」なんて言つて戸を開けてきちゃうけれども、今はピンポンをならさなくちやいけないでしょ。だからみんな玄関先くらいの話だけ、そういう親しみっていうのが段々薄らいじやつてね。

……(省略)……

S — 逆に私なんかは鍵を閉めるのが当たりまえの世代なので、何て言うか信じられないというか、

F — 社宅にいる時は鍵なんて持つていなかつたですよ。ええ、

S — そういうことなんだな、つて思つちやいますね。

F — だから、洗濯物やなんかがあると、雨が降つてきたりしたらみんな入れてくれたり。戸を開けて、ほおり投げて行つてくれたりしていましたけれども。会合かなにかの集まりがあると、みんな誘い合うんですね。「もう時間だから行こう」ってね。今はそういうあればいいですね。朝晩に行き会うと「こんには」「おはよう」って言うくらいで。あんまり人通りつていうのがないから。「あの人丈夫かしら、しばらく行き会わないけれども」とか言う人もいますけれどもね。

Y — 私は大阪生まれなんですが、Sさんは世代が違

うけれども、わかるような気がして。大阪市の市営住宅の平屋で育つたのですが、そうすると、隣の家との境があんまり高くなくて、家の中が見えちゃうんですよ。で、隣の人人が何をしているのかがわかる。

F — そういうの、ありましたよね。

Y — ありましたね。それが昭和30年代ですから。それも大阪の市内でもそうです。だから、普段のまさに醤油のやり取りもやっていましたし、貸し借りみたいなのも。

F — 今の住宅ではそういうのもないし。よく私らは、すぐに三養会に走つて、足りないものを調達したんだけれども、店が閉まつているとお隣さんに「あら、今日使おうと思つたら、お店が閉まつていたの」って貸してもらつたり。そういうのはありましたね。だから「会計までにちょっと3日あるんだけれども、家(うち)にこれが足りないんだけれども」って言うと、「家(うち)にあるから、じゃあ会計までいいわよ」となんてね。そういう貸し借りがありましたね。

【お話を聞いて】

S — 「こんなこと…」とはにかみながら、丁寧にお話をしてくれますけれども。

れたFさん。主婦ならではの生き生きとした社宅の生活感

が伝わる。文字化のための校正の際、Fさんには「顔から火が出るほど恥ずかしい」とまで言わせてしまつたが、無理を言つて掲載させてもらった。Fさんに限らず、自分の話が文字化される側だつたら、確かに驚いたり、慎重になつたり、恥ずかしい気持ちになる方は多い。けれども、あえて私の立場からは、その内容が「こんなこと」ではなく「面白い視点や気づき」として、迷惑がかからない程度に聞き集めていきたい。

Y一社宅でずっと暮らしてきた女性。普段の様子をいろいろと語っていた。二つの社宅を移った歴史。語りからは社宅ごとにかなり生活の事情が異なつていてることがわかる。一口で「社宅の暮らしは」と言えないことが実感できた。少し控えめだがしっかりと丁寧な語りの中に、女性が社宅の日常で他の女性たちと関係を築き、地域の活動も進めてきたという、『誇り』のようなものを感じ取れた。

猫の手も借りたくなる忙しさ

【2015年9月1日】—Fさん、志村(S)】

足尾にとつておなじみの食堂の奥さんから見た、閉山後の

店の様子について。当時は30代。

F一以前の足尾には小学校が5つ、中学校が3つあり、昭和28年に中学校が合併して1学年10クラス程の大勢の生徒と70人からの先生を抱えた県下のマンモス校でした。大勢の人がいたけれど、閉山後は年々学校も縮小されて、今では1学年7～10名ほど。部活も限られるようですが、でも、他へ行くことも不可能ですし、全国的に少子化の波の中にいるのですから、今は子どもたちの幸せを祈るのみですね。……(省略)……高齢化した今、足尾の商店も大変ですよ。人口は減るし、商いも以前ほどじゃなく不景気になり、後継者も考えられず廃業を余儀なくされね。今は観光町とはいえ、食べる場所も限られていますよね。地下資源を頼つて生活する人々にとつて、避ける事のできない現実でしょうか。

……(省略)……

S一閉山直後には、何か商店に影響がありましたか？

F一とにかく、閉山直後は忙しさが大変だった。引っ越す家ばかりで、もう自分の家で料理をやっていられないから、

食堂に来てご飯を食べて行くとかね。出入りが激しく、店の段取りが追いつかないくらい大変で、店の仕事に追われて過ごしましたね。

S — じゃあ、それまでは坑夫さんとかが仕事帰りに使つたり、家族が食べに来たりしますよね。閉山の時は、さらにいっぱい人が殺到したみたいな?

F — そうそうそう。結局、閉山は2月だったろ? 4月に間に合うように、どんどん引っ越して行く人ばかりだから、

学校の黒板には「誰が何処に行く」って記録されてね。だから、子どもが、「母ちゃん、俺たちはいつ引っ越すんだ?」って聞いてくるような、もう引っ越し当たり前だつて会話が家庭でされたという話だよ。引っ越しとなると、家(うち)みたいな店にお昼を頼むとか、「夜に一杯飲ましてくれ」とか。そんでもう大忙しだったよね。

……(省略)……

S — 閉山の前後で、例えば人の働き方や生活習慣だとカリズムが変わったと感じられたり、気付いたことはありますか?

F — 子どもの頃には本山にいたけれども、朝6時半といえ

ば、働いている人の通勤があつたんだよね。通路に、もう朝6時半といえば、真冬でも真夏でも、行列をなしてみんなが通っていたね。通勤の時間で、「ああ、ほら1の方(いちのかた)」「14が入るんだぞ、起きろや」って言うのが親の口癖くらいだったね。みんなカンテラを下げてね。その列が閉山でまずいなくなつたよね。閉山の後は今度は、引っ越しをする人の車の列が半年くらいはずつと続いたしね。

……(省略)……

F — 閉山で仕事を辞めて足尾から離れた方々は、埼玉県とかに集団就職みたいな形でまとまって雇用先に行つたみたい。「あれもいるから、俺もそこに行くべ」とかね。そういう話はお風呂でしたみたいですよ。

S — そうか、銅山関係の人は、共同浴場の中で就職活動の情報交換をしていたと。そうですよね、お風呂で一緒になりますよね。

たら「どうだい?」って話になりますよね。

F — うん。これが一番大きいみたい。そういう話題を作る所では。あとは、組合の詰所ね。「どういう所、良い所、無い所? 今日はどこか新しい就職口ないか?」ってね。町場の人っていうのは、全然そういうのに関係ないから。「かあちゃ

ん、俺どこどこに就職決まったよ」って風に報告に来てくれる人はいた。「世話になつたね。俺、いつつに発つからね」ってね。……（省略）……引っ越しの時にいらぬい物はそのまま置いておけるから、道路の隅には多くの家具や鍋、窯や冷蔵庫などが山のように並んでいましたね。それでも、古河

にいた人は衣食住が保障されていましたから、社宅に残つて暮らしてみたいという気持ちは強かつたと思うよ。血と汗で働いた人たちにとって、新天地に向かう意気込みと足尾を離れたくない複雑な気持ちが入り乱れて、名残惜しそうに足尾を離れて行つていましたよ。残された人たちにとっても、年をとつた人というのは親を置いては行けない人たちなので、町に起つられた企業に就職したとしても、慣れない仕事に苦労したと思いますよ。

【お話を聞いて】

S — 食堂を営んでいた方だからこそ、細やかな視点ではつきりと意見を言つて下さるFさん。昔に限らず、今に対する問題意識を持ち、包み隠さず正直にユーモラスに伝えてくれ、私自身がズキつと思い知らされてしまう。閉山といつ

妙な出来事にも、真っ正面から向き合い、今までの足尾に寄り添つて来たからこそ、優しく堂々としたお人柄になつていつたのかなと感じる。

飲み方の変化

「2015年9月2日 — Fさん、志村（S）】

同じく足尾の名店であるホルモン屋さんも、「閉山直後は案外忙しかった」とのこと。お店のカウンターから見ていた当時の様子。

S — 閉山の頃って、どんな感じだったか覚えてらっしゃいますか？

F — 社宅関係はあんまり出入りしていないから、わからないんですけども。閉山の時にはまだ、町には女性のいるお店屋さん。風俗関係のお店屋さんが何件ありましたかね、結構あつたんですよ。それで、風俗関係は、11時が閉店の時間なんで、家（うち）らは風俗ではないから、夜2時頃まで許可をとつて営業していたんですね。まあ、実際は2時くらいまではお客様の数は少ないですけれども、でも1時

閉山でお互いに別れ別れになるせいか、結構お客様が来ていましたんですね。その人たちのお店が11時で終わりですか

ら、それから家(うち)に来れるように、女性が家(うちに)に場所取りに来ていました。ハハ

S — そんなことがあつたんですか。

F — そんなことがあつたんですよ。うん。閉山の後ですね。

S — じゃあ、閉山で足尾を出なくてはならないっていうことで、最後にお別れをするようなことだったのですかね。

F — 別れを惜しんで飲み歩いていたのか、ね。2年間はそんなような状態で。「6畳の部屋の方に座りたい」とのことで、場所取りに来てね。ほとんど一杯になりましたね。

……(省略)……

S — じゃあ、閉山の前と後では、お客様の客層だつたりお店の使い方は変わりましたか?

F — 客層はやっぱり足尾の方ですからね。みなさん、何て言うのか、意外と労働者の町っていうのは飲み方が荒いんですね。荒いんだけども、閉山後はそういう雰囲気はなく、飲んでいましたね。うん。別れを惜しむというのか、どういうんでしうね。

S — スミマセン、「飲み方が荒い」っていうのは、ワイワイ、ガヤガヤ?

F — 以前はね。やっぱりあの、労働者同士だから、飲んだ後は喧嘩をするとか、ちよつともめるとかそういうことは往々にしてあるんですけども、閉山後の飲み方はそういう荒々しさはなく、楽しくというか…、飲んでいました。

S — ふーん。そうなんですね。

F — 一名残を惜しんで、別れを惜しんでというかね。うん。いつもの雰囲気とは違いますね。

……(省略)……

S — 常連さんも結構足尾を離れられたんですか?

F — 隨分ね。結局は年配者の方、そろそろ定年になるようなそういう方たちは「今さら、出て行くのも大変だ」ということで、残ったんでしょうけれどもね。若い方たちはこれからお仕事をしなくちゃいけないのでね。

S — 子どもも育てていかなくてはいけないですしね。

F — そんなんで。でも、その時はまだ景気が良かったので、会社見学をして、好みの所に就職をしたということですけれども。今ではできることですよね。

S — そうですね。今だと、選んでられないという感じですよね。

F — だからそういう点ではラッキーかな、悲しみの中でもラッキーな、

S — Fさんから見て、足尾を離れなくちゃいけなくなつた人たちはどんな風に見えましたか？

F — 間近にそういうのは見ていないからわからないですねけれども、やっぱり厳しかったですよね。みなさんね、これら他所に出て新たな生活をしていかなくちゃいけないので。それで、あの、足尾の町では部屋は他と比べて広いんですけど引っこし前のゴミ捨て場には、何か家財道具が多くて、家財道具を持って行かれない。

S — あ、次の家に？

F — ええ。それで引っ越しの際には、随分家財道具があちこちに捨ててありましたね。

S — あ、そなんですか。持ち運べなくて？

F — そうそう。家具。タンスとかね。いろんな家具があちこちで、山のように置かれて行きましたよね。

S — そなんですか。へー、引っ越しラッシュですかね。

F — なので、それを見た時にやっぱり：「どうなるんだろう」と思うようですよね。家族の方たちもね。道具持つて、段々増えるのが普通であつて、急にタンスを一竿、二竿置いて行くとか、その他の細々としたものを置いて行くというのは…。結局住宅関係か何かはわからないけれども、狭いからその道具を持って行かれなかつたんでしょうね。

S — ジゃあ、足尾はそういう意味で、家とかも住みやすかつたんでしょうかね。広かつたりとか、

F — 広かつたんでしょうかね。それだけの家財道具を捨てて行かなくちゃならない状態なんですね。まあ、行く先の住まいは狭すぎたのか、そのことは良くわからないですけれどもね。

S — でも、一人二人ではなく町中でそうだったとしたら、いろいろな事情で捨てなくちゃならないということですよね。…あと、社宅の人たちは毎日のように引っ越しがどこかにあって、お手伝いをし合つたと聞いたんですけども、

F — そうでしょうね。やっぱり、みんなさん何て言うかな、こう、友だち関係の範囲が広いですからね。みんな足尾の家族みたいな感じなんでしょうかね。だから、知っている人

はみんな手伝いに行くとかね。……（省略）……

S — 閉山後に、観光開発ということで銅山観光などができましたよね。そういった、観光していくアイデアはどう感じられますか？

F — やっぱり賑やかになることは良いことですよね。一時、随分減ったわけですからね。賑やかになることは良いことで、栄えてもうことは嬉しいことですよね。あとは、人の出入りが無ければお互困りますからね。

S — そうですよね。それと、閉山に閑らざなんですけれども、今までのお客さんの出入りみたいなのって、どう変わってきたというか。例えば閉山直後というのは忙しい時期だったんだけども、ある程度落ち着いてきた時期っていうのはあったのですか？

F — そうですね。他所の店はわからないですけれども、やっぱり人家が減るというのは八百屋さんにして、一般的に頼る人がいない訳ですから。どこも一緒でしょうね。ましてや、若手がいなくなるというのはね、即、店屋さんも影響するわけですよね。

S — ですよね。かといって、足尾にずっと住んでいた人も若

い人は外に出ちゃう。そうですか？。

F — だから平均年齢が高いんですね。足尾は。

S — 残れなかつたっていう感じなんですかね。

F — 職場がないということですね。職場があればね、みなさんやっぱり好きな足尾だから、携わりたかったんでしょうけれどもね。

……（省略）……

「お話を聞いて」

S — 普段お店とはちょっと違う、Fさんの表情や話し方が新鮮だった。閉山のキーワードとして、女性の店や箪笥が真っ先に出たのが意外だったが、どちらも町部だからこそ気付いた確かに閉山の変化。荒々しい鉱山の飲み方を、親しみを込めて懐かしんでおられたが、今まで様々な場面（修羅場）があつたのだろう。今はそんな飲み方は皆無だが、行けば誰かしらの常連さんが一人でくつろいでしたり、町内の何かの集まりがあつたり、評判を聞きつけて遠くからのお客さんがたりする。ちなみに、私はこの豚足が大好物だ。

1 「間歩（まぶ）鉱山の坑道で地表にぬけているものをいふ。」（金属鉱山研究会編集、『鉱山用語集』、東甲社、1976年、13頁）

2 山形にある永松鉱山は、明治24年に古河の經營に移り、昭和36年に鉱業所廃止。（参考：古河鉱業株式会社「創業100年史」、昭和51年）

3 同じ作りの長屋社宅が並んでいるため、社宅は「いろはにはへと」と手前から順に呼ばれていた。住所の番地のようなものらしい。

4 静岡県にある久根銅山は、明治32年に古河の經營に移り、昭和45年に久根鉱業所操業休止。和歌山県にある飯盛鉱山は、大正8年に古河が譲り受け、昭和43年に飯盛鉱業所廃止。（参考：古河鉱業株式会社「前掲書」）

5 昭和41（1966）年7月21、22日、古河鉱業株式会社足尾鉱業所が事業合理化のために労働者25名を8月1日付けて解雇。うち、7名が足尾銅山不当解雇反対同盟を結成し裁判闘争に入る。昭和45（1970）年1月10日、宇都宮地裁では申請人の主張をほぼ全面的に認めた形で判決が下され、企業側はこの判決を不服として控訴。昭和48（1973）年8月6日、東京高等裁判所第7回目の和解斡旋により合意。

6 銅山労働をする方の中でも正式な職員ではない社外労働者のことを指す。下請けなどて一定期間足尾銅山で働いている方のこと。足尾出身ではなく、全国から働きに来ていたが、仕事のやり方や労働環境は大きな違いがあった。組夫（くみふ）明治期には職夫二類夫に当り、大工、煉瓦職、左官、石工、土工、鳶畳職、樵職、炭焼使夫等が相当する。戦後は、鉱山と請負組との契約の下で作業をする人をさすようになった。（村上安正「足尾銅山史」、随想舎、2006年、6-17頁）

7 技術関係の仕事（電車、機械、測量などを担当する作業員のこと。直接の場合は、進鑿（しんさく）、支柱、運搬、縫路などの作業を指す。）

8 「飯場（はんば）採鉱と製鍊に作業員を調達して作業請負を行う下請け組織。単身就業者のために宿舎と食事賄いを提供して労働と日常生活の管理を行った。」（村上安正、前掲書、6-18頁）

9 「平九郎（へいくろう）仕事を休むこと。またはよく欠勤する作業員をさす。欠番、バッタする。」
（金属鉱山研究会編集、前掲書、83頁）この言葉は差別用語だと主張される場合がありますが、当

時の状況を語つていただいている意義を重視し、そのままの言葉を掲載しています。

10 操法とは、消防訓練における基本的な器具操作・動作の方式のこと。足尾町消防団は伝統的によく訓練され、昭和36年2月には日本消防協会より優良消防団として表彰旗を授与された。昭和39年8月には、県下消防団ボンブ操法競技大会可搬ボンブの部で優勝、昭和43年3月には模範消防団として消防庁長官より竿頭綬を授与された。』足尾町郷土誌編集委員会編集、『足尾郷土誌』（有不三工房平成5年、35頁）

11 細尾峠は道幅が狭く、62カ所に及ぶアピングカーブがあり、特に冬季は通行に難渋をきたした。台風時には、道路崩壊で足尾が陸の孤島と化すこともしばしばであった。陸の孤島からの脱出と、町の振興発展のために、長年にわたり「日足トンネル」の早期完成を町民の悲願として各関係機関に働きかけた。昭和47年に栃木県が主体となって着手する運びとなり、足尾

銅山閉山の年、昭和48年10月22日から約6年の年月を経て、昭和53年3月30日ようやく開通した。（参考：足尾町郷土誌編集委員会、前掲書、58頁）

12 銅山最盛期には足尾地域内に9店舗あり、町の消費の約7割を占めていたといわれる足尾銅

山生協「三養会」は、閉山後の人口減少や日足トンネル開通による他地域への大型店を利用する人が増えたことなどから、店舗が減少。2015年現在は、通洞売店、渡良瀬売店の2店舗の営業となっている。

13 昭和55（1980年）に足尾町砂畠地区に開設された足尾双愛病院は、24時間体制での救急対応を行う総合病院。通院、入院で利用することはもちろんのこと、足尾内の方が働く貴重な勤め先にもなっている。

14 銅山で働く人は3つの勤務時間に分けられていた。方（かた）はその呼び方。「方（かた）」操業上の就業区分で1日3区分の場合は、1の方、2の方、3の方とした。通常2の方が日勤の就業区分になるが、管理部門は1時間繰り下げている。』村上、前掲書、615頁）

Sより

志村春海「平成25年～27年度足尾地域おこし協力隊」

Nより

中山京「平成25年～27年度足尾地域おこし協力隊」

『小滝坑　みたい姿は　こけの奥』この川柳は足尾に来たばかりの頃に思いつきましたが、今も同じ気持ちです。足尾での話の内容や今の現状を知るたびに、「みてみたかった」と思うことが沢山あります。ちなみに、3年間の聞き取りの感想を川柳に表すなら、『目の前に　いない人まで　主人公』となります。聞き取りでは、私自身が会えない方々（例えば、閉山で足尾を離れた方、外国人労働者、亡くなつた方が登場します。その存在に気づけたことが、私にはとても大切なことです。これからも聞き取りで、目の前にあるありのままの声や姿、その背景にも注目していきたいと思います。

足尾の方の協力はもちろん、活動の意義に共感し、アドバイスや、荒々しい原稿案を丁寧に確認・校正してくれるなど、沢山の方に助けていただきました。本当にありがとうございました。

足尾に赴任してから3年間、大変多くの方々に足尾のことを教えて頂きました。みなさんにとっては日常で当たり前の話なのかもしれません、私にとっては驚きが多く、みなさんの話によって日々足尾への関心が深まり、足尾への愛着が増していました。

足尾に赴任してから3年間、大変多くの方々に足尾のことを教えて頂きました。みなさんにとっては日常で当たり前の話なのかも知れませんが、私にとっては驚きが多く、みなさんの話によって日々足尾への関心が深まり、足尾への愛着が増していました。

足尾の方々の記憶は、まさにそれ自体が足尾の資源です。貴重な記憶を私たちの中にだけ留めず、いかに外に発信していくかも重要なだと思思います。足尾にある記憶はきっと多くの人たちを魅了すると信じています。

私たち地域おこし協力隊を温かく受け入れて、多くのことを教えてくださいました皆さんに、心より感謝しております。ありがとうございました。

Yより「暮らしの語りを聞き取る意味」

好井裕明〔日本大学文理学部社会学科教授〕

志村さんたちの聞き取りのお手伝いを始めて数年が過ぎています。銅山関連、山仕事などさまざまな場で仕事をしてきた人たちの語り、社宅で毎日の暮らしをたててきた女性の語りなどと出会い、足尾にも、分厚く多様な「人びとの歴史」が息づいています。

普通、地域の歴史を考える時、当時のできごとを伝える新聞記事や文書や写真など記録された資料をもとに考えようとします。状況を客観的に判断できる重要なものがからです。でも近年、人びとの生活史そしてライフストーリー（生活・人生の物語）を聞き取り、人びとの語りや記憶から地域の歴史、人びとの歴史を考えようとする動きが盛んに行わされてきています。いわば地域で生きてきた一人一人の主観的な記憶、考え、価値観などを丁寧に聞き取り、そこから地域を捉え直そうとする動きなのです。

個人的な記憶をいくら聞いても、それはあくまで「その人」にとっての主観的な世界のことだけじゃないだろうかと思うかもしれません。確かにその通りなのですが、人びとの暮らしの語りには、決して記録された資料や写真などだけではわからないさまざま「生活の知恵」「暮らしの価値」が含まれているのです。また主観的な世界にしても、ただ個人のものとしてではなく、まさに「足尾という地域」で生き暮らしてきたという意味で地域に根差し、地域の中でもさまざまな他の人びとともに暮らしてきた個人の主観的世界なのです。だからこそ、足尾で生きてきた人びとが語る「暮らしの語り」を丁寧に聞き取り、それを重ね合わせていくことで、さまざまな視点からみなぎられた「生活の場」としての足尾の姿が確実に姿を現していくだろうと思っています。

冊子を読まれ、語りに共感される方、あるいは「いや、ちょっと違うかな」という違和を覚える方もおられるでしょう。それが自らの生活史をふりかえる大事なきっかけです。みなさんも「足尾で生きてきた」自らの歴史を語ってみませんか。

年表（足尾の聞き取りや日常生活で、必要なキーワードや出来事。）

和暦	西暦	できごと	人口
天文19	1550	銅山が発見される：古河鉱業(株)(現在、古河機械金属(株))閉山時発表	
明治10	1877	古河市兵衛が銅山を買収、経営を開始	
明治14	1881	鷹之巣坑で直利を発見	
明治16	1883	本口坑で大直利を発見	
明治24	1891	田中正造が帝国議会で鉛毒問題を質問 足尾鉱業所が初めて砂防工事に着手する	11,664
明治29	1896	第1回(鉛毒)予防工事命令発令(明治36年まで5回)	11,448
明治30	1897	農商務省訓令により東京大林区署が「足尾官林復旧事業」を開始	27,426
明治34	1901	田中正造が鉛毒問題で明治天皇に直訴	22,708
明治35	1902	足尾銅山との示談により旧松木村廃村	22,708
明治40	1907	坑夫による大暴動事件が起こる	34,824
明治41	1908	本山に生活協同組合「三養会」を開設 (明治39年に三養会設立準備会発足、本山三養会一部開店)	28,618
大正元年	1912	足尾鉄道 桐生駅～足尾駅開通	29,774
大正10	1921	県内初のメーデーを足尾で開催	27,387
昭和20	1945	足尾銅山労働組合同盟会結成	20,997
昭和26	1951	前橋當林局の川端勇作が植生盤を発明する	
昭和29	1954	小滝坑廃止、フィンランドのオートクンプ社から自溶製鍊技術を導入	
昭和31	1956	「自溶製鍊法」、「電気集塵法」、「接触脱硫法」を応用した脱硫技術を世界で初めて実用化し、従来に比べ亜硫酸ガスの大幅な排出削減に成功	
昭和48	1973	足尾銅山閉山(2月28日)	8,699
昭和53	1978	日足トンネル開通(延長2,765m)	6,426
昭和55	1980	足尾銅山観光オープン。坑内観光が始まる	6,078
昭和63	1988	製鍊所が事実上の操業停止	4,935
平成8	1996	「足尾に緑を育てる会」の活動が始まる(平成14年、NPO法人に認証)	4,077
平成18	2006	今市市、旧日光市、藤原町、足尾町、栗山村が新設合併し、新たに日光市が誕生	3,196

〔典拠〕

『足尾町閉町記念 足尾博物誌』(平成18年2月足尾町)、『足尾銅山近代化産業遺産MAP』(平成26年3月、第6刷改訂版 日光市教育委員会事務局文化財課世界遺産登録推進室)、「森よ、よみがえれ——足尾銅山の教訓と緑化作戦」(秋山智英、1990年4月、株式会社第一プランニングセンター)より引用。人口データは、『足尾町閉町記念 足尾博物誌』、永井護「足尾銅山の生産システムの変遷と空間的都市構造」(平成20年7月1日、日光市教育委員会足尾銅山跡調査報告書)他、広報あしお、広報にっこうを参考にしている。

用語集

緑化の歴史（治山、植生盤、山仕事、植樹）

昭和31(1956)年に自熔製鍊法による煙害防止への具体的な取り組みが始まるのと同時に、本格的な荒廃地の緑化に着手。荒廃した山地に、治山ダムや緑化工などを配置し、山崩れの防止や緑のダムとしての水質源の確保をする治山事業と、土石流などを止めるための砂防堰堤設備を配置したり、土砂を押さえるための山腹緑化を行い、上流域の土砂災害と下流域の洪水氾濫を防止する工事方法がある。この冊子で主に取り上げられる植生盤とは、植樹用の種の入った土の板上のものを指し、これを人力で荒廃地の斜面に止めていった。人間の力が及ばない場所には、ヘリコプターを使って肥料や種の散布を行う方法がとられた。平成8(1996)年からはNPO法人「足尾に緑を育てる会」、平成17(2005)年からはNPO法人森びとプロジェクト委員会が活動を開始し、環境学習や植樹体験イベントを通じ緑化活動を行っている。

閉山

戦後、世界的に貿易の自由化が進み全国の鉱山にも影響が出始め、昭和47(1972)年11月1日、古河鉱業では鉱山部の廃止(製鍊所は存続)という閉山計画を発表。町で設けた閉山問題特別委員会や、銅山労働組合、「閉山反対町民大会」などによって、従業員の転職の斡旋や、過疎化の阻止や地域振興について話されたが、閉山自体を阻止することはできず、昭和48(1973)年2月28日に閉山した。

閉山後の3本柱

閉山後の基本対策として、栃木県が主となり足尾町振興緊急措置計画が昭和48(1973)年2月に策定された。『町の基盤整備』『企業誘致による産業開発』『観光資源の開発』の3本の柱を元に、県と町が7ヵ年計画で昭和55(1980)年の完成を目指された。足尾トンネルの開通や観光開発などが実施されたが、実現されなかった計画もあった。

新日光市誕生

平成11(1999)年ころから國の方針で市町村合併が推進され、日光地区5市町村(今市市・日光市・藤原町・栗山村・足尾町)でも合併の気運が高まる。平成15(2003)年、「日光地区合併協議会」設立。平成18(2006)年3月20日に、新「日光市」が誕生。

[参考]

ふるさと足尾歴史セミナー自主研究会、『足尾銅山百選—産業遺産活用の手続き』、平成4年。足尾町郷土誌編集委員会、『足尾郷土誌』、(有)不二工房、平成5年。足尾町、『足尾町閉町記念「足尾博物誌』』、平成18年。

ごめんください、足尾のこと教えてください！—その2

地域おこし協力隊による聞き取り抜粋集—2015

発行日・2016年2月11日

発行・日光市役所足尾総合支所総務課

編集・日光市足尾地域おこし協力隊

デザイン・木村 稔将

協力・聞き取りに協力してくれたみなさま、

古河機械金属株式会社、新井雅之、伊東幸一、栃木県立文書館、好井裕明
写真・伊東信、新井常雄

日光市役所足尾総合支所総務課

〒321-1514 栃木県日光市足尾町通洞8-2
TEL: 0288-93-3115

© 禁無断転載

「写真について」

前回の冊子と同様に、掲載している写真は新井常雄さん（1946-2013年）、伊東信さん（1919-2015年）が撮影したものです。お二人は写真撮影仲間で、生前には休日にお弁当を持って一緒に足尾町内の撮影をしていましたそうです。伊東信さんは、自身の写真を見せてくれたり、経験談を話して下さるなど、私たち協力隊の活動にご協力をいただいておりましたが、2015年3月に永眠され、ご自宅には多くの写真やネガなどが残りました。ご遺族のご理解、そして栃木県立文書館からのご協力を賜り、新井常雄さんの写真が収蔵されている栃木県立文書館に、伊東信さんの写真類も寄託される予定となっています。